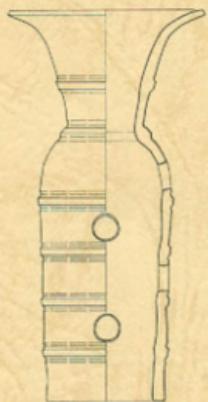


熊本県文化財調査報告 第136集

やつ しろ おお つか
八代大塚古墳

都市計画道路八代臨港線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査



1993

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第136集

八代大塚古墳

都市計画道路八代臨港線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

1993

熊本県教育委員会



八代大塚古墳全景（南西上空より）

序 文

熊本県教育委員会では、熊本県土木部の委託を受け、都市計画道路八代臨港線の建設事業に伴う八代大塚古墳の周濠部について、発掘調査を実施いたしました。

八代大塚古墳は、八代平野に分布する数少ない前方後円墳のうちの一つとして、また過去の調査において人物埴輪の頭部が出土した古墳として知られております。

今回の調査では、幅約11mの周濠をめぐらす前方後円墳であることがわかり、また多数の埴輪の破片が、大きな成果を得ることができました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術・研究上の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に際しましては、文化財保護の観点から多大な御協力を惜しまれなかつた熊本県土木部都市計画課、八代土木事務所、ならびに、御指導・御助言をいただきました諸先生方に心から厚く御礼を申し上げます。

平成5年3月31日

熊本県教育長 道 越 温

例　　言

- (1) 本書は、熊本県教育委員会が平成3・4年度に実施した、八代市上片町下野森に所在する八代大塚古墳の発掘調査報告書である。
 - (2) 発掘調査は、都市計画道路八代臨港線建設に伴う事前調査として実施した。
 - (3) 調査には、八代土木事務所や八代市教育委員会及び調査指導の先生方をはじめ、関係各位の全面的な協力を得た。また牛歯の調査には、鹿児島大学農学部西中川駿先生の手を煩わせた。
 - (4) 遺構の実測及び写真撮影は、高木正文・山城敏昭・安達武敏・奥田和秀・福原博信・長尾至明が行った。
 - (5) 遺物は、熊本県文化財収蔵庫で整理し、遺物の実測や図面製図は主に高木が行い、須恵器の実測と製図は植野治代が、また遺物の写真撮影と焼付は白石巖が当った。
 - (6) 本書の執筆は、第Ⅰ章第1節と第Ⅳ章第4節を松本健郎、第Ⅱ章を澤田宗順（八代市立博物館未来の森ミュージアム学芸員）、第Ⅲ章を吉永　明（八代市教育委員会文化課主事）、その他を高木が担当した。また、牛歯の鑑定結果について西中川駿・日高祥信の両先生に玉稿を頂き、付論として収録させて頂いた。
 - (7) 本書に使用した挿図類の方位は、すべて磁北を示した。
 - (8) 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、高木が担当した。
-

本文目次

第Ⅰ章 調査の経過と組織	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の組織	2
第3節 調査の経過	3
第Ⅱ章 古墳の位置と環境	
第1節 古墳の位置と地理的環境	7
第2節 古墳の歴史的環境	7
1 縄文時代	7
2 弥生時代	10
3 古墳時代	10
4 古代	14
第Ⅲ章 古墳の記録と調査史	
第1節 昭和30年代以前の古墳	15
第2節 昭和43年次調査	17
1 遺構	18
2 遺物	18
(1) 墓輪	18
(2) 須恵器	18
(3) 土師器	20
(4) 石製品	23
第Ⅳ章 調査の成果	
第1節 古墳の現状	24
第2節 周濠の調査	24
1 道路の工法と調査の手順	24
2 周濠の断面と層位	26
3 周濠の形状と規模	31
第3節 周濠の遺物	33
1 墓輪	33
(1) 墓輪の出土状態	33
(2) 墓輪の観察	39

2 須恵器・土師器	53
(1) 須恵器と土師器の出土状態	53
(2) 須恵器と土師器の観察	54
3 牛齒	55
(1) 牛齒の出土状態	55
(2) 牛齒の観察	56
第4節 古墳の保護と活用	56
第V章 まとめ	
1 古墳の環境	57
2 周濠とその遺物	57
3 墳形と規模	58
4 くびれ部の遺物と古墳の年代	58
付論 熊本県八代大塚古墳出土の牛齒	西中川 駿・日高祥信
はじめ	61
出土牛齒の概要	62
考察	64
まとめ	64

挿 図 目 次

第1図 古墳位置図	6
第2図 周辺遺跡図	8
第3図 周辺地形図（昭和39年）	12
第4図 周辺地形図（昭和55年）	13
第5図 八代大塚古墳測量図（昭和31年）	16
第6図 八代大塚古墳測量図（昭和43年）	17
第7図 墳輪・石製品実測図	19
第8図 土師器実測図	20
第9図 須恵器編年図	21
第10図 古墳の全景と調査区位置図	25
第11図 調査区全体図	27
第12図 1・2 トレンチ土層断面図	29

第13図	D区東側土層断面図	32
第14図	A区遺物出土状態図	34
第15図	B区遺物出土状態図	35
第16図	C区遺物出土状態図	36
第17図	D区遺物出土状態図	37
第18図	E区遺物出土状態図	38
第19図	埴輪実測図（1）	40
第20図	埴輪実測図（2）	41
第21図	埴輪実測図（3）	42
第22図	埴輪実測図（4）	43
第23図	埴輪実測・拓影図（5）	45
第24図	埴輪実測図（6）	46
第25図	埴輪実測図（7）	47
第26図	埴輪実測図（8）	48
第27図	埴輪実測図（9）	49
第28図	埴輪実測図（10）	50
第29図	埴輪実測図（11）	51
第30図	須恵器・土師器実測図	54
図1	周濠の牛齒出土状態図	61
図2	周濠の牛齒出土状態写真	62
図3	白齒の各部位の名称	62
図4	八代大塚古墳出土の上顎白齒	63

表 目 次

第1表	周辺古墳一覧表	9
第2表	埴輪観察表（1）円筒埴輪	44
第3表	埴輪観察表（2）朝顔形埴輪	45
第4表	埴輪観察表（3）円筒埴輪・朝顔形埴輪	52
表1	八代大塚古墳出土牛齒の計測値	63

図版目次

卷頭図版 八代大塚古墳全景（南西上空より）

図版1 水利事業前の古墳群空中写真（昭和40年頃）

図版2 水利事前後の古墳群空中写真（昭和50年代後半）

図版3 1) 古墳全景（北から）

2) 同上（南から）

3) 周濠A・B・C区検出状態

図版4 1) 周濠A区遺物出土状態（全景）

2) 同上（部分）

3) 周濠A区埴輪出土状態

4) 同上

5) 周濠A区須恵器出土状態

図版5 1) 周濠B・C区遺物出土状態

2) 周濠B区遺物出土状態

図版6 1) 周濠C区遺物出土状態

2) 同上（部分）

図版7 1) 周濠A・B・C区完掘状態（北西から）

2) 同上（東から）

図版8 1) 周濠D区遺物出土状態

2) 同上（部分）

図版9 1) 周濠D区遺物出土状態（部分）

2) 周濠D区東側土層断面

図版10 1) 周濠E区埴輪出土状態

2) 同上（部分）

図版11 1) 周濠D・E区完掘状態（北西から）

2) 同上（東から）

図版12 周濠出土埴輪（1）

図版13 周濠出土埴輪（2）

図版14 周濠出土埴輪（3）

図版15 周濠出土埴輪（4）

第Ⅰ章 調査の経過と組織

第1節 調査に至る経過

昭和63年4月、県土木部都市計画課から都市計画道路・八代臨港線について、道路が八代大塚古墳の真横を通過する予定であるため、その取扱いについて協議を受けた。

路線図によると、古墳の墳丘からは僅かに離れているが、古墳の周囲には周濠が存在する場合が多いので、確認調査の必要があること、古墳は八代市の指定史跡であるので、八代市教育委員会とも協議する必要があることを伝えた。

その後も何度も口頭での協議が行われたが、古墳付近の工事は3~4年後になるため、具体的な取り組みは行われなかった。

平成3年4月、県八代土木事務所から、具体的な取り組みについて再度協議を受けた。

文化課からは、古墳の本体は市指定史跡（昭和38年4月20日）であるので路線変更を申し入れたが、この道路についてはすでに昭和41年9月に都市計画決定をみており、路線自体の変更是無理とのことであった。

指定や都市計画決定が古く、その時点での協議が十分行われなかつたことと、昭和62年の発掘調査報告書に周濠についての記載が不十分であったことが反省点としてあるが、取りあえず市の意見を聞くことになった。

八代土木事務所からの協議を受け、八代市教育委員会では文化財保護委員会を開催し、現地調査と協議を行った結果、試掘調査の結果をみて判断することであった。

市の意向を受けて、八代土木事務所長から平成3年6月26日付けで試掘の依頼を受け、平成3年8月5日~8月19日に試掘調査を行った。試掘調査の結果、周濠が確認されたので、その旨を八代土木事務所長と八代市教育長あて通知した。

八代土木事務所では、文化財保護の立場から工法を検討し、試掘結果を参考として張出し歩道構造として遺構を保存する案を提示し、八代市教育委員会に現状変更を申請した。

八代市教育委員会では、文化財保護委員会を開催し、再度協議した結果、過去の経緯及び土木事務所の工法変更等を勘案し、平成3年12月5日付けで現状変更を許可した。

平成4年1月13日付けで熊本県知事から文化財保護法第57条の3第1項による発掘通知書が提出され、同時に文化課に発掘調査の依頼があった。調査は、平成3年度中に完了する予定であったが、一部については民家の移転の関係で平成4年度に実施することとした。

（松本 健郎）

註1 大塚古墳発掘調査団・八代市教育委員会『八代大塚古墳』八代市文化財調査報告第1集 1987

第2節 調査の組織

平成3年度～平成4年度の発掘調査と整理作業・報告書作成の組織は、下記の通りである。

平成3年度

調査責任者	文化課長	大塚 正信
	教育審議委員（課長補佐）	隈 昭志
	課長補佐	松崎 厚生
	文化財調査第二係長	松本 健郎
調査事務	経理係長	木下 英治
	主任主事	大広美枝子
	主任主事	川上 勝美
調査担当	参 事	高木 正文
	嘱 託	奥田 和秀
	嘱 託	福原 博信
	臨時職員	安達 武敏

平成4年度

調査責任者	文化課長	大塚 正信
	教育審議委員（課長補佐）	隈 昭志
	課長補佐	松崎 厚生
	文化財調査第二係長	松本 健郎
調査事務	主幹（経理係長）	木下 英治
	参 事	高濱 保子
	参 事	相馬 治久
調査担当	文化財保護主事	山城 敏昭
	嘱 託	長尾 至明
整理担当	参 事	高木 正文
	嘱 託	植野 治代
	嘱 託	木下春千代

調査指導

三島 格（肥後考古学会会長）・江上 敏勝（八代市文化財保護委員）・緒方 勉（日

第3節 調査の経過

本考古学協会委員）・佐藤 伸二（八代高等専門学校助教授）

専門調査

西中川 駿（鹿児島大学農学部助教授）

調査協力

熊本県土木部都市計画課・八代土木事務所・八代市教育委員会（松山 丈三・吉永 明）

八代市立博物館未来の森ミュージアム（澤田 宗順）・四月一日渡・坂田 和弘

調査作業員

稻田 幸・稻田 敏子・江藤ハツ子・麦田 厚子・宮本マツエ・四月一日渡・四月一日

優美子・徳田 国義・徳田富佐子・浜田 一穂・浜田 富子・宮崎伊津子・山田富士子・

松岡 純子・松岡シズヨ

整理作業員

白石 巍・江島 園子・吉田 律子・河崎 節子・荒牧 陽子・塙田喜美子・古崎 章
ほか

第3節 調査の経過

調査は、まず周濠の有無等を確認するための試掘調査を実施し、その後、水田部分の発掘の
第1次調査、宅地部分の第2次調査を行った。

試掘調査（平成3年7月～8月）

7月30日

県八代土木事務所の工務課松永信弘氏と現場で調査地を確認。八代市教育委員会の吉永明氏
に発掘調査作業員の手配を依頼。

8月2日

現場事務所設置。調査資材等搬入。

8月5日

高木と作業員で発掘調査を開始。竹や草を刈った後、用水路より墳丘側に幅1.5m、長さ3.6m
の1トレンチを設定し発掘。

8月6・7日

1トレンチ発掘。墳丘裾部の周濠内側法面を確認。周濠内から埴輪片出土。

8月8日

現地検討会があった。文化課松本係長・高木・奥田、八代土木事務所工務課福岡健吉係長・松永氏、八代市教育委員会吉永氏、八代市文化財保護委員約8名出席。調査は、1トレンチの延長上の水田部分に幅1.5m、長さ5.0mの2トレンチを設定し発掘開始。



試掘調査状況

8月9~14日

2トレンチ発掘。周濠の外側法面を確認。1・2トレンチ土層断面及び、埴輪片出土状態実測。なお、12日から奥田が加わり、調査員は高木と2人になった。

8月16日

1・2トレンチとも写真撮影をし、出土遺物を取り上げる。また、1トレンチは埋め戻しをし、試掘調査を完了した。

8月19日

調査資材撤収。

第1次調査（平成4年1月～3月）

1月16日

調査担当の高木と安達で調査地確認と関係者挨拶に行く。

1月22日

現場事務所設置。

1月23日

調査資材等搬入。調査範囲の水田下の表土を重機で剥いだ。

1月24~30日

遺構検出。擾乱部分の発掘と遺物取り上げ。



1月31日～2月21日

周濠部分を北からA～C区と分け、B・C区を発掘。埴輪片が多数出土。

2月24~28日

周濠のB・C区写真撮影実測、遺物取り上げ。A区発掘（A区からも埴輪片出

A～C区 調査状況

土)。

2月27日

調査後の古墳整備のことで、八代市教育委員会、八代土木事務所、大揮環境施設計画事務所の三者が現地協議をされた。

3月2日

安達に代わり福原が調査に加わる。

3月3～10日

A区発掘。

3月6日

鹿児島大学農学部西中川助教授らが来られたので、周濠C区出土の齒を見て頂いたところ牛の歯であることが分かった。

3月11～25日

A区発掘・写真撮影・実測・遺物取り上げ。また、調査区測量・全景写真撮影も行った。
この間、三島 格・江上敏勝・緒方 勉・佐藤伸二の各氏に調査指導を受ける。

3月26日

調査用具を水洗・整理し、調査用具と遺物を撤収した。

第2次調査（平成5年1月～2月）

1月7日

第二次調査担当の山城が調査地確認に行く。又、八代土木事務所とも調査打ち合せをする。

1月11日

現場事務所設置。

1月12日

調査資材搬入。重機で表土剥ぎを行い、周濠を検出し、D区とE区に分けた。

1月13～22日

D区とE区をそれぞれ発掘。埴輪片が多数出土。

1月25日

長尾が加わり、山城と2人で調査を進める。

1月26日～2月5日

遺物の露出・写真撮影・実測をくり返す。また、D区東側の土層断面図も作成。

2月8日

E区の水路側が崩壊したため、土嚢・杭・板で応急処置をし、一部遺物を一括で取り上げた。

2月9～15日

C区よりD区は周濠が深くなっていることが分かった。全ての遺物を取り上げ、D・E区の実測・調査区測量・全景写真撮影を行った。

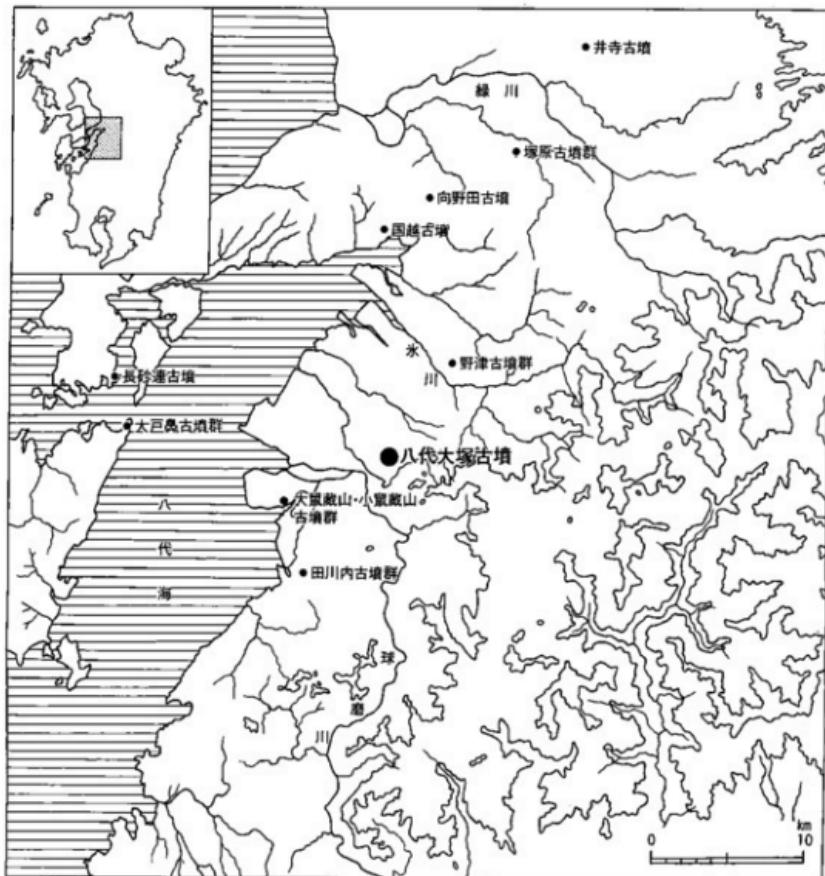
2月16日

調査用具整理し、遺物と共に撤収した。

2月17・18日

調査区埋め戻し等を行い、調査完了。

(高木 正文)



第1図 古墳位置図

第Ⅱ章 古墳の位置と環境

第1節 古墳の位置と地理的環境

八代大塚古墳は、熊本県八代市上片町下野森1170番地に位置する。八代平野の南部、球磨川下流域の右岸（北側）にあり、国土地理院発行の5万分の1の地形図「八代」に位置を求めれば、図幅南から0.8cm、東から19.1cmの所にあたり、球磨川から北に1,600mほど、日奈久断層崖を構成する山麓からはわずか500mほどの距離に位置している。

八代平野は、熊本県の南部、八代海の東岸に形成された南北25kmにわたる沖積平野で、平野西側の大半は近世以降に拓かれた干拓によって形成されている。

平野東部は九州山地（球磨山地）の西縁部にあたり、北北東—南南西に日奈久断層と呼ばれる大断層崖が走り、300～500m内外の高さから30度ほどの傾斜を持って落ちる顕著な断層崖である。

八代平野はこれら山間から大小多くの河川によって運び出された堆積物により形成された扇状地や、日本三急流のひとつである球磨川をはじめ、日置川（水無川）、氷川、砂川などから大量の土砂を運び出し自然に陸化した複合三角州によって形成された沖積平野である。

八代海は潮の干満の差が大きく広大な干潟ができるため、近世以降は数多くの干拓事業が進められ、現在の八代平野が形成されている。

第2節 古墳の歴史的環境

1 繩文時代

八代平野では縄文時代の遺跡は少ないが、九州縦貫自動車道建設工事に伴い川田町西の川田小筑遺跡の調査で縄文晚期の土器片が出土している。井上町の鐘楼堂遺跡からは縄文晚期の夜臼式土器が発見されている。球磨川の左岸（南側）では敷川内町の五反田貝塚から縄文中期から後期の土器が出土している。また、産島貝塚や高島遺跡といった孤島の上でも土器や石器が検出されているが、これらはいずれも限られた面積で広汎な集落遺跡を形成するに至っていない。



第2図 周辺遺跡図 (縮尺1/20,000)

第2節 古墳の歴史的環境

第1表 周辺遺跡一覧表（※印は前方後円墳）

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物等
1	八代大塚古墳※	上片町下野森	須恵器・土師器・円筒埴輪・人物埴輪・石製表飾・馬具
2	長塚古墳※	〃〃	土師器・須恵器・円筒埴輪
3	天神古墳	東片町岡神	墳頂に石灰岩巨石が露出
4	むかいやば古墳※	〃〃	墳頂に砂岩割石が散在
5	御経塚古墳	〃〃	宝鏡印塔・五輪塔残欠
6	茶臼山古墳※	上片町下野森	墳頂に砂岩割石が散在 現況円墳
7	高取上の山古墳※	〃高取	割石積石室 須恵器・馬具・鉄器・小玉・銘・太刀
8	鬼の岩屋第1号墳	〃〃	鬼の岩屋
9	鬼の岩屋第4号墳	〃〃	安山岩巨石3個・須恵器
10	鬼の岩屋第5号墳	〃〃	墳頂に安山岩巨石が露出
11	方見堂遺跡	東片町岡神	弥生式土器・須恵器・土師器・近世陶磁器他
12	清水古墳	岡町谷川清水	人骨・鉄器・須恵器・金環他
13	門前古墳※	〃門前	変形獸首鏡・方格規矩鏡・勾玉・管玉・刀 円文石材
14	谷川古墳群(3基)	〃谷川	1・2号 鬼の岩屋 3号 石障系石室
15	竜峰貝塚	〃	須恵器・土師器
16	興善寺廐寺跡	興善寺町馬場	布目瓦・塔心礎・須恵器
17	興善寺馬場遺跡	〃志水	弥生式土器・須恵器・土師器・瓦器
18	興善寺志水遺跡	志水	土馬・子持勾玉・滑石製小玉・須恵器・円面鏡
19	車塚古墳※	川田町東車塚	
20	川上古墳群(3基)	〃川上	石灰岩の石室
21	岡塚第2号墳※	〃岡塚	
22	岡塚第1号墳	〃〃〃	石障系石室 長290cm×幅208cm 厚15cm 深さ不明
23	東川田遺跡	〃西	弥生式土器・石斧・土師器
24	川田京坪遺跡	〃西京坪	弥生式土器・須恵器・土師器(「川大」文字他)・近世陶磁器
25	川田小筑遺跡	〃小筑	晩期土器・弥生式土器・須恵器・土師器・木製品・近世陶磁器
26	田平山火葬墓	東町田平山	轟骨器9点
27	橋ノ上貝塚	西片町橋ノ上	土師器
28	西片遺跡	〃園田	須玖式・野辺田式・須恵器・土師器・土鍤
29	沖片遺跡	〃辻田	野辺田式・須恵器・土製紡錘車・円面鏡
30	長田遺跡	長田町石原	黒髪式・野辺田式・須恵器・土師器・軽石岩偶
31	鬼の岩屋虚空蔵古墳	〃大間	鬼の岩屋
32	長田町2号墳	〃〃	畠の一角に安山岩巨石1点が露出する
33	白石貝塚	上日置町白石	黒髪式・土師器・須恵器・土鍤・人骨
34	乙丸5号墳	宮地町乙丸	石灰岩2点
35	乙丸6号墳※	〃〃	

2 弥生時代

弥生時代になると八代平野においてもかなりの遺跡が知られるようになり、龍峯山山麓から日置川流域にかけての一帯に分布密度が濃くなっている。

川田町東の東川田遺跡、川田町西の川田京坪遺跡、西片町の西片町遺跡・沖片遺跡、長田町の長田町遺跡、日置町の白石貝塚、井上町の鐘樓堂貝塚、竹原町の竹原遺跡などの遺跡から弥生土器が出土している。いずれも黒髮式・免田式・野辺田式などといった中期から後期の土器である。発掘調査された遺跡が少ないため、面的な広がりや遺跡の性格は不明確なものがほとんどであるが、弥生中期ごろからかなりの規模の集落が形成されるようになったと考えられている。

これまで球磨川以南の平野部では弥生の遺跡の存在は確認されていなかったが、最近、豊原下町の下堀切遺跡の調査が行われ、弥生後期の集落をめぐる溝が発見された。この遺跡は、球磨川左岸に形成された冲積平野の末端近くに位置していて、土器、石器のほか、鉄斧の柄などまとまとかたたちの木製品が出土している。この遺跡のあり方から、球磨川左岸の冲積平野も弥生時代にはかなり利用できたと考えられる。

3 古墳時代

古墳時代になると八代平野部には多くの古墳群が形成される。

一つは川田町の古墳群で、車塚古墳、岡塚2号墳（岡の坊古墳）という前方後円墳を中心に、車塚古墳群（3基）、岡塚古墳群、川上古墳群（3基）がある。圓場整備のため消滅した古墳も多く、元々は15基を越える古墳があったと考えられる。

車塚古墳・岡塚2号墳の墳丘は開墾によって著しく削り取られ変形しており、やっと古墳の存在を示しているにすぎない状態にある。ともに本格的な調査はされていないが、車塚古墳は九州縦貫自動車道建設工事に伴う調査で、くびれ部と前方部側に2本のトレンチが設けられ、周溝の状態から前方後円墳であることが確認されている。いずれも東部山麓に平行するように南北に並んでいる。

川上1・2号墳は小高い山の中腹に立地した単室の横穴式石室墳で、周辺で多く取れる石灰岩の巨石を古墳石材として用いている。

もう一つは上片町から東片町に分布する古墳群で、大塚古墳群、上片町鬼の岩屋古墳群、乙丸古墳群、東片町古墳群によって構成されている。中心となるのは大塚古墳群に属する八代大塚古墳・茶臼山古墳・高取上の山古墳といった前方後円墳群で、東片町古墳群のむかいやば古墳、乙丸古墳群の乙丸6号墳も前方後円墳である。

大塚古墳群は前述の前方後円墳群である。（八代大塚古墳について詳しくは別稿に譲る。）八

第2節 古墳の歴史的環境

八代大塚古墳の北側に長塚と呼ばれる前方後円墳があったことが知られている。

茶臼山古墳は墳丘が二段築造の前方後円墳で、後円部はかなり残っているが、前方部は早くから開かれ数戸の民家が建っている。墳丘上には墓地が築かれ著しく変形している。復元すれば後円部の幅50m、前方部の長さ60m、同幅30mと、八代平野最大の古墳であろうと推定されている。八代大塚古墳の南側に位置し、50mほどの距離である。

高取上の山古墳は八代大塚古墳から南南西に250mほどの距離に位置する前方後円墳である。墳丘上に熊野座神社が祀られている。墳丘前方部はかなり残りがよいが、墳丘上に社殿が営まれている。後円部は墳丘がかなり削り取られ、石室の奥壁と側壁の一部が残っている。割石を小口積にした横穴式石室で、大きさはおよそ幅4m、奥行4.2mと考えられる。

この地域の特色として「鬼の岩屋」と呼ばれる巨石を用いた後期の古墳を多く見ることができる。これらは大きな自然石を組み合わせて横穴式石室を作ったもので、その多くは安山岩の自然石を用いている。球磨川右岸から龍峯山山麓部にかけて集中して分布しており、上片町鬼の岩屋1号墳、長田町の虚空藏古墳、龍峯地区の谷川・行西古墳群などがある。築造年代は6世紀後半から7世紀初めごろである。注目すべきは、八代市付近には安山岩を産出する所がなく、他の地域から運ばれてきたものであることである。石の形態から水俣石と呼ばれ、水俣市付近か鹿児島県長島付近から運ばれた可能性が高い。現在「鬼の岩屋」と呼ばれる古墳はいくつかのタイプが考えられるが、水俣石と呼ばれる巨大な安山岩の自然石を用い、石室内に両袖石を持った複室墳が鬼の岩屋古墳の基本的なタイプと考えることができる。最近、八代市以外では宇土郡不知火町の鬼塚古墳が確認されている。

球磨川左岸の平野部では横穴式石室の石障や箱式石棺の内側に円文などを刻んだ装飾古墳が多くみられる。球磨川河口にある鼠藏町の鼠藏古墳群（大鼠藏山・小鼠藏山古墳群）、平野南端部の敷川内町の五反田古墳、日奈久新田町の田川内古墳などがその代表である。大鼠藏箱式石棺群出土の石棺側壁には線刻で、弓、5本の矢を入れた鞘、紐でつるした鏡、三角板を纏った短甲、鏡をさげた革鞘入りの大刀の5つを配列して、一つの図柄をあらわしている。これは武人としての持ち物、武器・武具をあらわしていると考えられ、この二重円文は鏡としてよりも、古代の弓矢の付属具である鞘と大刀にさげた弓の替弦を巻き籠めておく弦巻を考えることはできないであろうか。

八代平野には干拓以前は八代海に浮かぶ小島であった所が多いが、產島・大島・高島・小鼠藏島・大鼠藏島にはこれまで古墳が確認されている。特に、大鼠藏山古墳群の中の一つの楠木山古墳は前期様式の堅穴式石室を持ち、碧玉製紡錘車や古い形式の土師器が出土しており、築造された年代は4世紀と考えられる。八代平野南部では最も古い古墳として注目される。



第3図 周辺地形図（昭和38年）（縮尺1/6,000）

第2節 古墳の歴史的環境



第4図 周辺地形図（昭和55年）（縮尺1/5,000）

4 古代

古代寺院跡として興善寺町の興善寺廃寺跡、妙見町の護神寺跡があり、両遺跡からは塔心礎が発見されている。興善寺廃寺跡は古代の八代郡寺と考えられているが、最近では古代の芦北郡の範囲の問題も含めて、芦北郡寺ではないかとの指摘もある。

清水町の洗切遺跡からは、奈良三彩片をはじめ墨書き文字のある須恵器、ヘラ書き文字のある土師器が出土している。墨書き文字は「王成古」と書かれ、ヘラ書き文字には「宣仲」「宣」「旦仲」「高人」「四郎」「五月」「六寺」など描かれていた。この遺跡は郡衙に付属した工人集団の居住地と考えられている。

川田町西の川田京坪遺跡からは、「川大」とヘラ書きされた土師器が出土している。

『延喜式』『和名抄』には駅家跡の一つ片野駅の存在が記されているが、これは八代市上片町、東片町、中片町、西片町付近に想定されている。

また、西片町の沖片遺跡、宮地町の池尻遺跡からは須恵器の円面鏡が出土している。古蘿町の御内遺跡からは瑞花双鳳八稜鏡が発見されている。

以上のようななことから、球磨川下流域の右岸から八代平野の東部、龍峯山山麓にかけての一帯は、特に古墳時代から古代にかけて政治と文化の中心地として極めて重要な位置を占めていたと考えることができる。

(澤田 宗順)

第Ⅲ章 古墳の記録と調査史

第1節 昭和30年代以前

八代大塚にほど近い鬼の岩屋1号墳については、江戸時代の『人境考』や『肥後国誌』に「窟」或いは「鬼の岩屋」として記録が見られる。しかし、八代大塚については何も触れられていない。他の文献でも遺構や遺物等の出土は不明であり、また古墳に関する伝承等も何ら残されていない。ただし隣接する茶臼山古墳の墳丘上には、近世の墓石とともに多重塔の軸部が1基みられ、その表面には「文応」年銘が拓本によって判読できる。文応は西暦1260年に限定されるので、鎌倉時代には茶臼山古墳が地城の墓地として利用されていたらしい。八代大塚あるいはその墳、何らかの盗掘や改変を受けている可能性も考えられるが、現状としてその痕跡は見当らない。

八代大塚が記録に表れるのは『八代郡誌』からである。以下本文の一部を引用する。

「大塚古墳 太田郷村字下野森にあり。西南に長く瓢を据えるが如く、長三十間、南北二十間、高さ後円三間半、前面二間半、車塚にして耳付、前方の一部に墓あり。其他は耕地となる。塚上岸脚より円筒埴輪の破片を出す。此古墳は耕地となりて級々開墾せられつつあるも未だ瓢形を崩さず。車の部耳の部等稍原形を存じ、考古の資料とするに足る。」

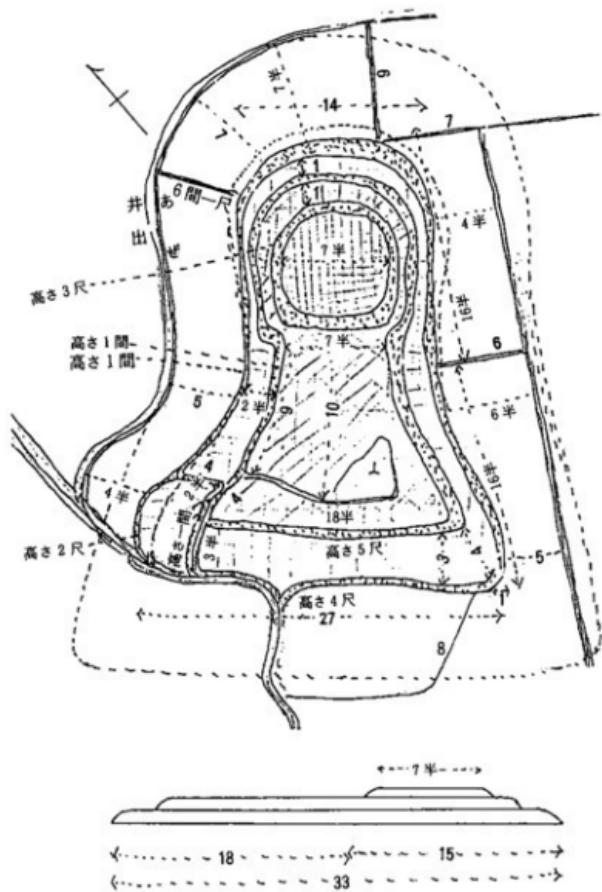
「耳付」とあり、くびれ部に造出があったことを指している。また「岸脚」とあるから郡誌の書かれた昭和初期には古墳周囲には周濠が残っていたことも考えられる。

次に乙益重隆氏は昭和29年刊行の『肥後上代文化史』で、「『大塚』のごときは長さ約55米位、後円部の高さ約6米位、前方部の高さ約4米余、中央くびれ部の両側に、俗に耳と呼ばれる土段がある。埴輪円筒の破片も散布し、外形上の観察では中期の要素を多分にもっている。」と述べて、くびれ部の造出を認めている。

その2年後の昭和31年には八代市史編纂を目的として、詳細な測量が行われた。著者蓑田田舎男氏は測量成果から、前方部が後円部直径の1.93倍と幅広であり、畿内後期に属する墳形の特徴とみて、6世紀前半の築造時期を得られている。蓑田氏は、周濠の痕跡について以下の通り述べている。「墳丘の周囲は一面の水田で、堀の跡は幅五、六間、割合よく残っている。そのうち西と北側は、堀の岸が畦と小さい用水路になって最もよく原形が残り、東側は耕地整理のため直線の畦に跡を留めている。また南側は岸の線が明らかでなく、東北隅も原形が変わっている」。第5図はその測量成果であるが、これによると後円部北西側には幅7間（約13m）程の周濠跡を示す畦が歴然と見られ、今回の発掘調査で確認された周濠幅とほぼ一致している。

後述する43年の調査時の測量図（第6図）や着手直前の写真（図版1）に見るとおり、後円

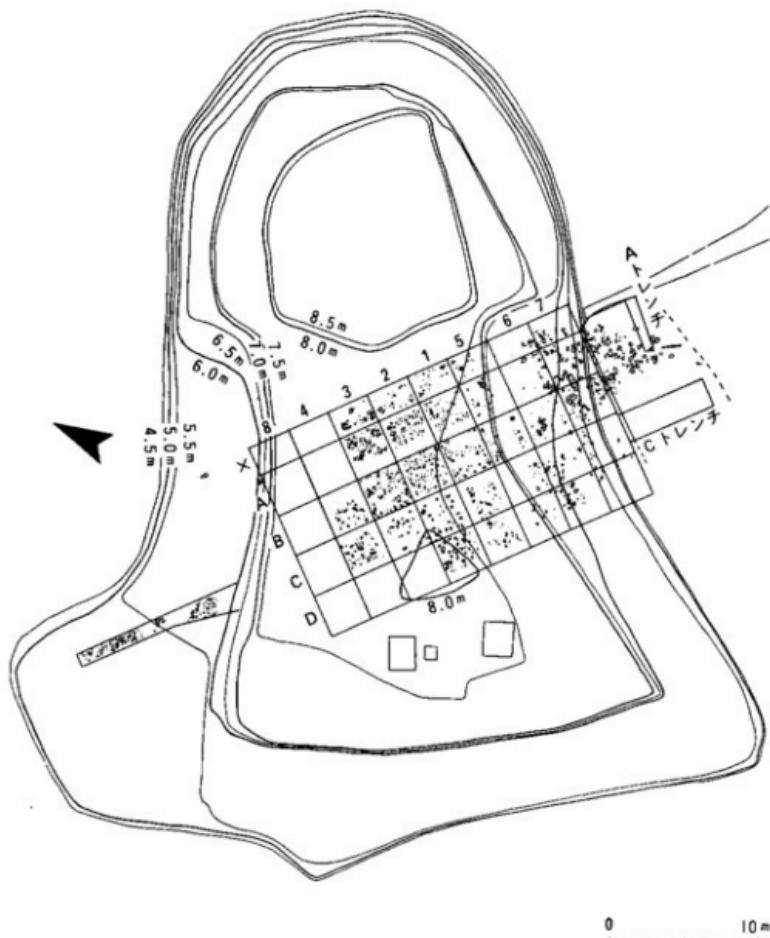
部側に31年次にはあった畦畔が、東側の一部を残して他は完全に消失し水田となっている。つまり昭和初期段階にある部分残っていた周濠は、その後埋まり水田となり、その畦畔が30年代初期までは西側に見られたが、整地の結果43年にはごく一部でしか見られなくなったという変遷を辿ることができる。



第5図 八代大塚古墳測量図（昭和31年）

第2節 昭和43年次調査

昭和41年に九州農政局の八代平野水利事業のため、古墳墳丘部を横断する水路工事の計画が明らかになった。関係者間で幾多の討議を経た結果、同43年に乙益重隆熊本女子大教授を団長とする発掘調査団が組織され、工事で掘削される予定のくびれ部の発掘調査が行われた。その



第6図 八代大塚古墳測量図（昭和43年）

成果は19年後の昭和62年に調査報告書として刊行された。以下報告書を要約して述べる。

1 遺 構

測量の結果、全長55.7m・後円部径28m・前方部長27.7m・同幅43.1m・くびれ部幅30.3mをはかり、後円部が前方よりわずかに高くなっている。主軸はN-52°-Eである。墳丘中央部の横断調査のため石室の出土が期待されたが、調査区では確認されなかった。ただし、墳丘東側のA-7区で遺物が集中している点から、後円部から真南に開口する石室の前庭部に近いものと思われる。周濠はくびれ部東側に、幅7m以上、深さ約1.4mのものが確認された。周濠底からは人物埴輪頭部が出土している。西側では断面観察の結果「明確な周濠は存在しなかった」ため、八代大塚の周濠は部分的にめぐらされた異例なものとの結論が得られている。しかし今回の調査結果とかつての周濠畔から判断して、本当に周濠がないのか、周濠切れ目のブリッジ部分であったのかの判断は課題として残される。

次にくびれ部を最下部まで掘り下げた結果、墳丘築造の技術について以下の4点が掲げられている。(1) 築造に当っては、原地表面に礫を敷き、以後約80cm盛り土をすることに礫層をおき、その最上段に脊梁部をつくっていること。(2) 3段築造の方法をとっていること。(3) 3段目はあざやかな盤築状態を示し、運搬具1個分～2個分の運搬土量を示している。(4) 使用した土壤のうち、第1段までは古墳周辺の土壤を使用し、第2段以上はおそらく田平山あたり(八代大塚の東方山地)から運んできたもの、以上4点の特色が明らかにされている。(1)については、古墳中央部に礫層の高まりがみられることから、原地形は八代平野に形成された自然堤防であろうとする。本古墳を初め、高取上の山古墳・東片町古墳群・車塚古墳群が山麓に沿って、南北に連なって立地していることもその証左と考えられる。

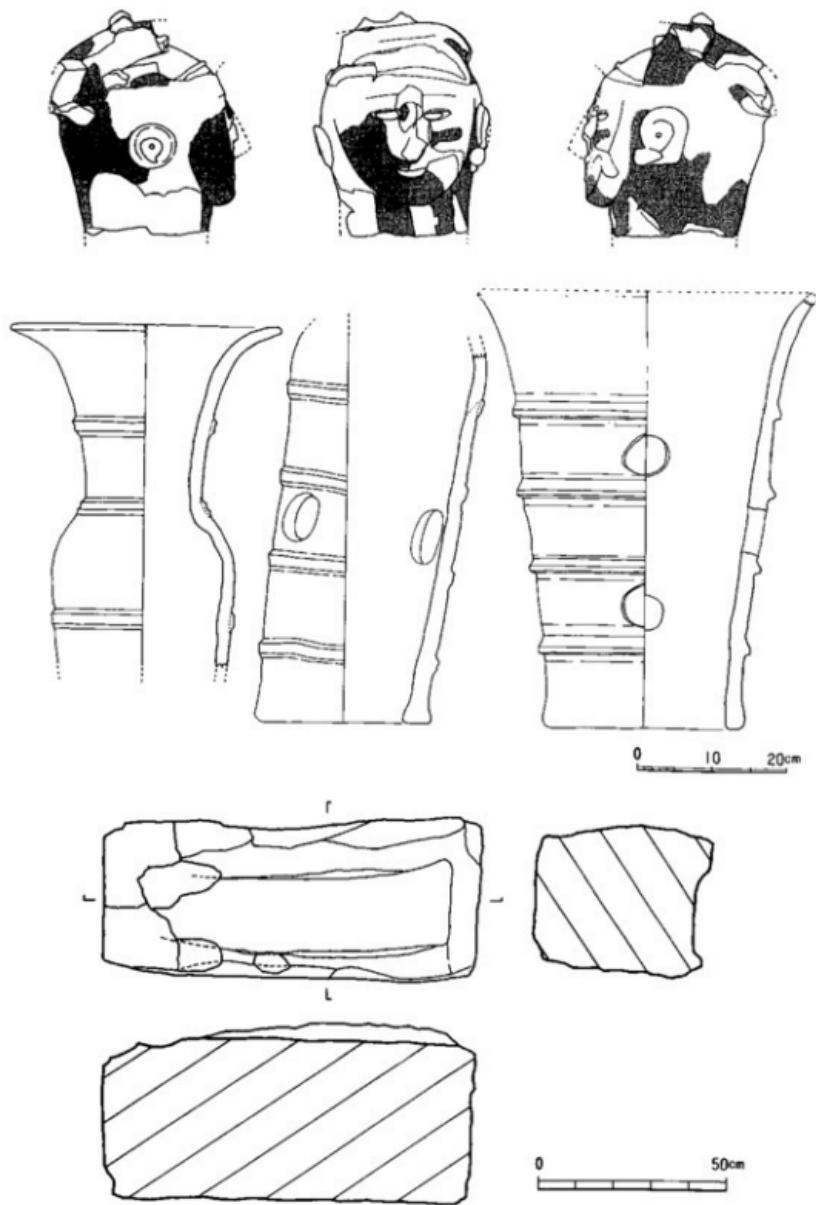
2 遺 物

(1) 墓輪(第7図)

円筒埴輪は円筒形と朝顔形、形象埴輪では家形や幾何学文を有するもの、そして東側周濠底部から中空の頭部と、表土からは同じく中空の左腕が出土している。人物埴輪については虚空蔵古墳(玉名郡菊水町)で頭部が出土した他、チブサン古墳(山鹿市)・塚坊主古墳(菊水町)・高熊古墳(鹿本郡植木町)・国越古墳(宇土郡不知火町)・姫の城古墳(八代郡竜北町)で一部が出土している。

(2) 須恵器(第9図)

報告分の46個体は壺11点・高壺18点・甌3点・器台3点・甕6点・壺3点・その他3点からなり、3類に分類されている。I類に属する器形は八代大塚古墳出土の須恵器中で最も古式を示す一群で、下限はIII類に分類される一群である。

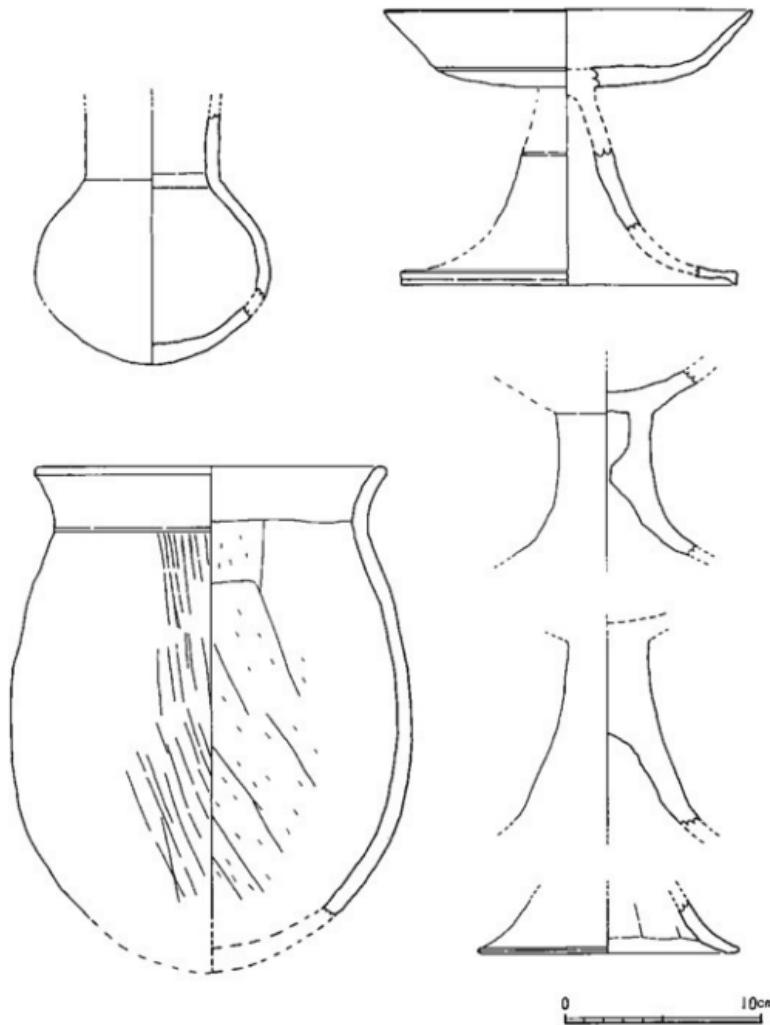


第7図 墓輪・石製品実測図

八代大塚出土の須恵器の編年については、下限を示すⅢ類については6世紀末、上限のⅠ類については6世紀初め頃の年代を考える。

(3) 土師器(第8図)

東斜面や東周濠より、須恵器や埴輪に混じって出土している。多くは小破片であり、器形を



第8図 土師器実測図

器種 時期	有蓋壺	壺	その他
I			
II			
III			

復元できたものは長頸壺3点・高杯4点・甕1点と、須恵器に比べて極めて少ない。胎土には砂を多く含むものと、殆ど含まないものとの2種類がある。胎土中の砂は白色のものが多く、須恵器や埴輪の胎土中の砂と共通している。

(4) 石製品(第7図)

全長100.5cm、最大幅43.0cm、最大高48.0cm、軽石や黒耀石を含んだ比較的やわらかい凝灰岩で作られている。一部に自然面を残し、全体が粗く加工されている。幅3.0cmと1.5cmのノミ痕が見られる。上面中央を幅23.0cm、深さ2.5cmの深い溝状のくぼみが走り、一方の木口の下部を鉤の手に切り込んでいる。古墳が築造されてまもなく、周辺の須恵器とともに前方部東斜面に置かれたものと考えられる。可能性としては石人石馬と同じ石製表飾品の未製品ではないかと思われる。

この他、鉄製品としては鉄釘・馬具の断片が計6点出土している。

(吉永 明)

第IV章 調査の成果

第1節 古墳の現状

八代大塚古墳は、主軸をN-52°-Eにとり、全長約55.7mの前方後円墳と考えられている。

墳丘の旧状は、開墾のため三段築成を思わせる形状をしていたが、昭和42・43年度の調査の後、後円部に接して盛り土をして道路が造られ、さらに、その2~3年後に圃場整備に伴って道路に接して水路が掘られたため、後円部の現状は四段築成のように見える。

先に述べたように、前方部と後円部のくびれ部付近は、八代平野農業水利事業の工事によって掘削され、用水路に蓋をして再び盛り土をしているので、旧状のままではない。

墳丘上は、以前は一部に墓地があり、その他は耕地として利用されていたが、現在は畠柑園も一部に残っているものの大部分は荒地となっている。ただ、墓地は前方部端部にそのまま続いて造られている。

墳丘の高さは、前方部が標高7.2m、後円部が標高8.6mあり、現水田面（標高4.2m）からの高さは、前方部が3.0m、後円部が4.4mである。

なお、後円部には、戦時中に防空壕が掘られた事もあるが、主体部は不明である。

周濠については、昭和42・43年度の調査の際に、くびれ部東側から少し南に行った所（前方部側）で、幅7m以上（外側の端が未確認）のものが確認されているものの、部分的にしか周濠は掘られていないと判断された。調査の直後、後円部に接して道路が造られ水路が掘られたのも、この部分には周濠がないであろうとの判断からである。

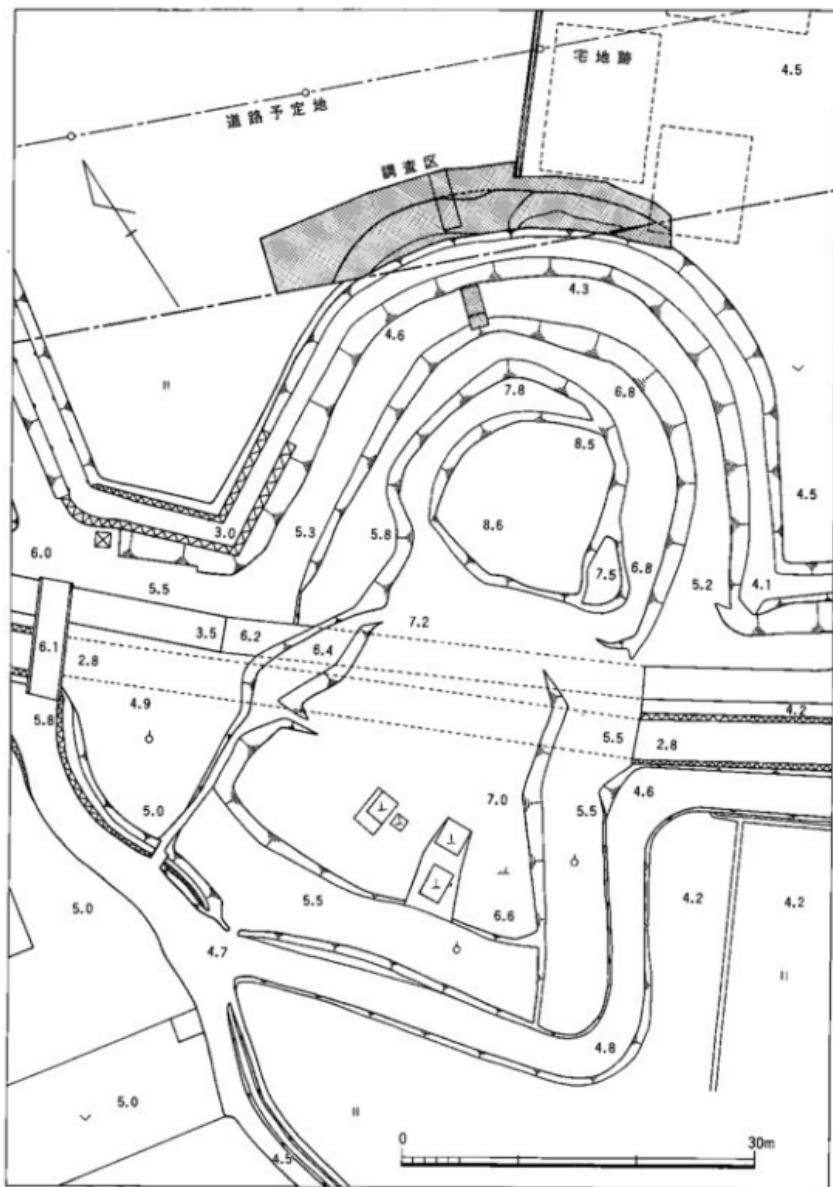
第2節 周濠の調査

1 道路の工法と調査の手順

都市計画道路八代臨港線が、八代大塚古墳のすぐ北側を通るように計画されたので、周濠の有無を確認するための調査が必要になった。そこで、平成3年8月に、まず試掘調査を実施した。

試掘調査は、水路を挟んで、墳丘側に1トレンチ、水田側に2トレンチを設けて掘り下げた。その結果、両トレンチにおいて、周濠の両端を確認でき、周濠内から埴輪の破片などが出土することがわかった。

第2節 周濠の調査



第10図 古墳の全景と調査区位置図

このため、関係者で協議し、道路敷になる部分の周濠については、橋状に設計し、破壊を最小限度に留めることになった。従って、調査は破壊されない水路下部については行わず、工事の影響を受ける恐れのある水路を除いた道路敷部分についてのみ行なうことになった。

本調査は、用地の関係で、水田部分について平成3年度（平成4年1月～3月）、宅地部分について平成4年度（平成5年1月～2月）行った。

水田部分は、2トレンチを含む東側をC区とし、その西側を任意の線でA・B区に分けて調査をした。また宅地部分の調査においても任意の線を設けて、D・E区に分け、特にその境界のD区東側は埋土の観察をしながら調査した。

2 周濠の断面と層位

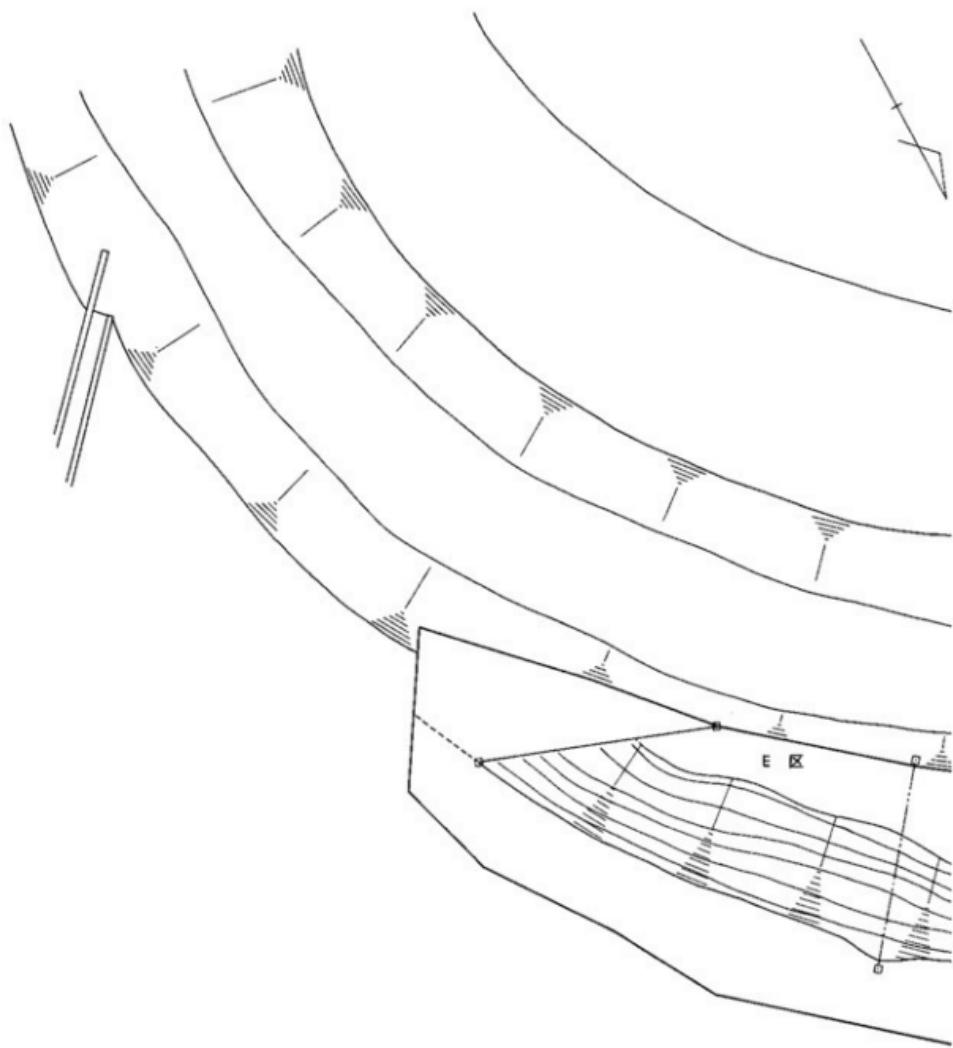
試掘調査において、墳丘側に幅1.5m、長さ3.6mの1トレンチ、水路を挟んで、延長上の水田面に幅1.5m、長さ5.0m（本調査においてC区とした時点では長さ5.75mに拡張）の2トレンチを設定し、周濠の有無を確認したところ、前述のように周濠が確認され、埋土の状態なども観察することができた。

1・2トレンチにおいては、第12図に示したように、周濠よりも上に8枚の層の堆積がみられた。その層位を見ると、下部に水田の床土である鉄分を含んだ灰茶色で硬質のh層と、その上に灰色で粘質の水田耕作土のd層がある。このd・h層は、墳丘側において、周濠の法面を切る形で墳丘に1m程食い込んでおり、水田化の時点で墳丘が少し削られたことを示している。また、g層は墳丘の一部が崩れ落ちたもの、e・f層は水田の一部が掘り返された跡と考えられる。なお、水田耕作土（d層）の上面は標高4.12mである。

昭和42・43年度の調査の後、後円部に接して道路と水路が設けられたが、a～c層は道路にした時の盛り土である。これらの盛り土は、他所から持つて来られたとのことである。表土のa層に含まれる瓦の破片は後に捨てられたものである。この道路はあまり利用価値がなかったらしく、現在は荒れ地となっている。

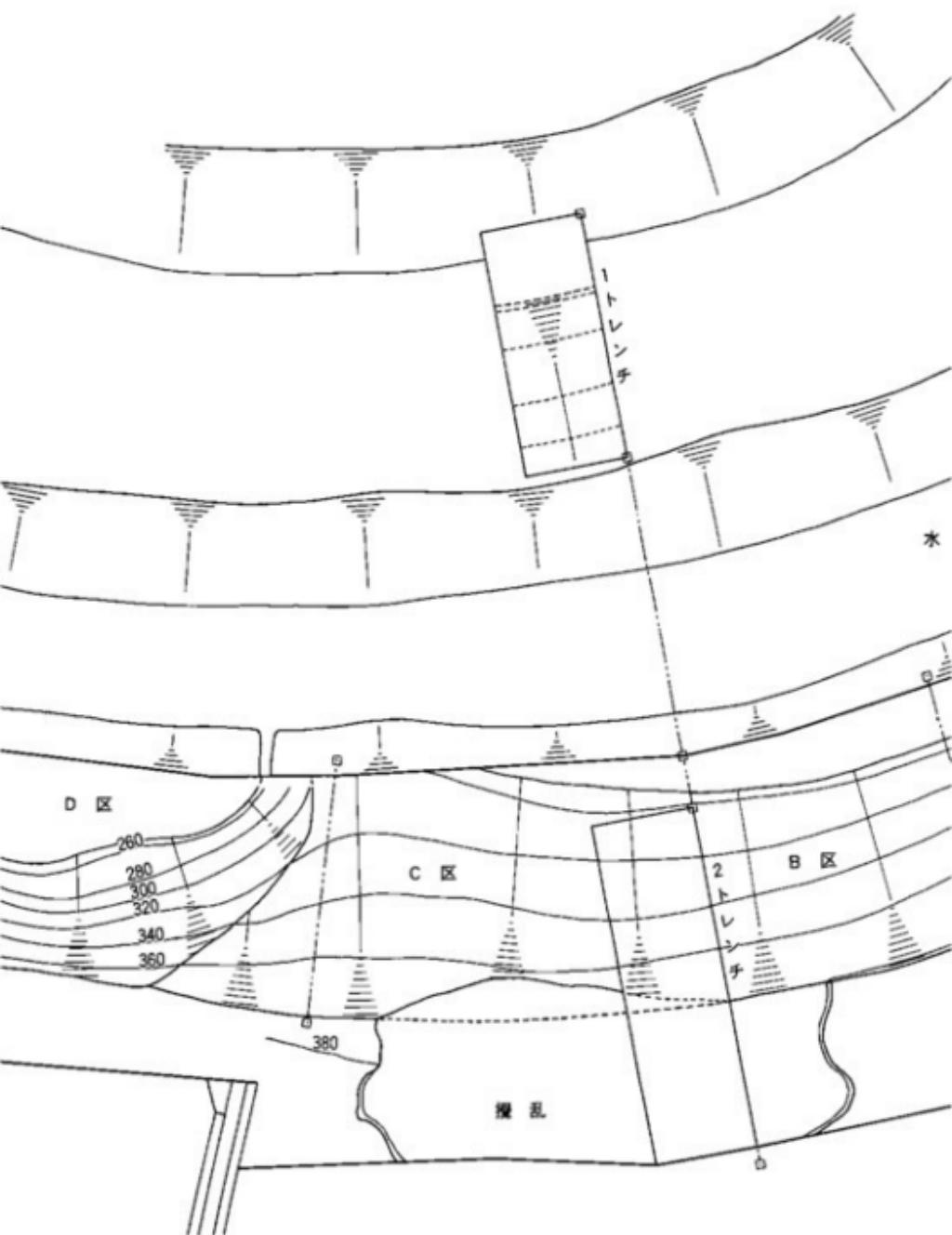
1・2トレンチにおける周濠の状態をみてみると、墳丘側においては、標高4.05mのところから掘り込みが確認でき、そこから1.7mまでは約20度の緩やかな角度で傾斜し、それより濠の中央に向かって約10度のさらに緩やかな角度で傾斜していることがわかる。一方、水田側（濠の外側）においては、標高3.87mから周濠の掘り込みが始まり、約2.5mまでは内側の法面と同じく約20度の角度で傾斜し、そこから約10度の角度で傾斜して、約55cm行った所で周濠底に至っている。なお、周濠の確認幅は10.5mで、深さは約1.3mであるが、周濠の幅は古墳築造時に11m程あったものと考えられる。

次に1・2トレンチの周濠の地山をみると、厚さ40cm程の灰褐色粘砂質土層から掘り始めており、厚さ80cm程の暗灰色砂礫層を経て、周濠底は灰色粘質土層に10cm程掘り込んでいる。ま



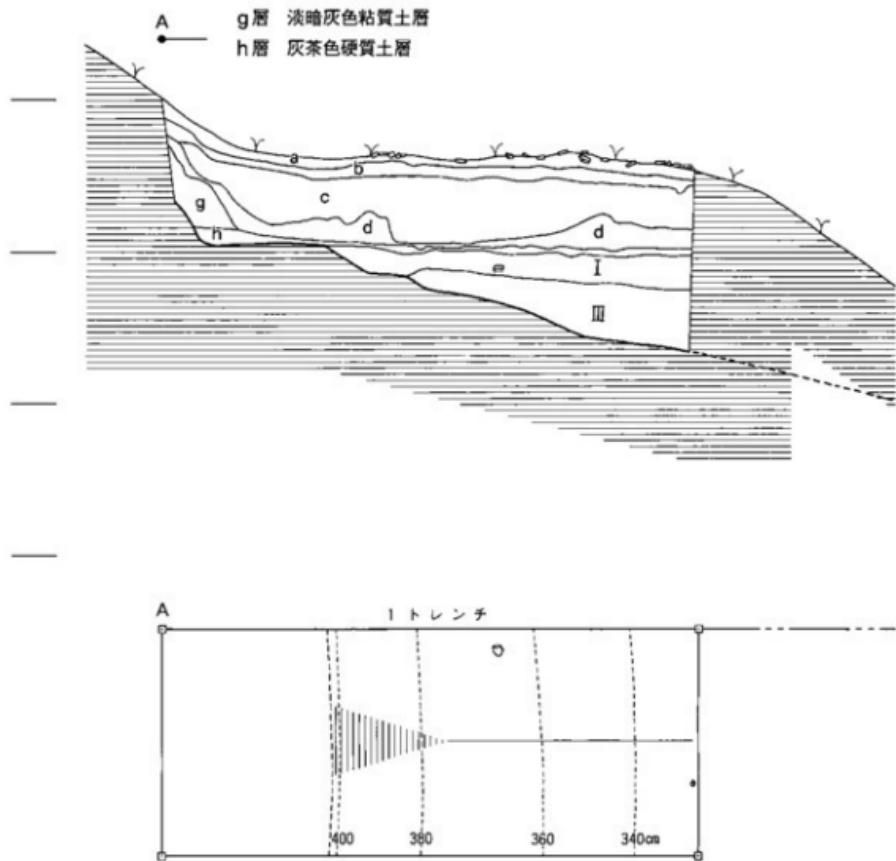
第11図 調査区全体図

堆 丘 (後円部)

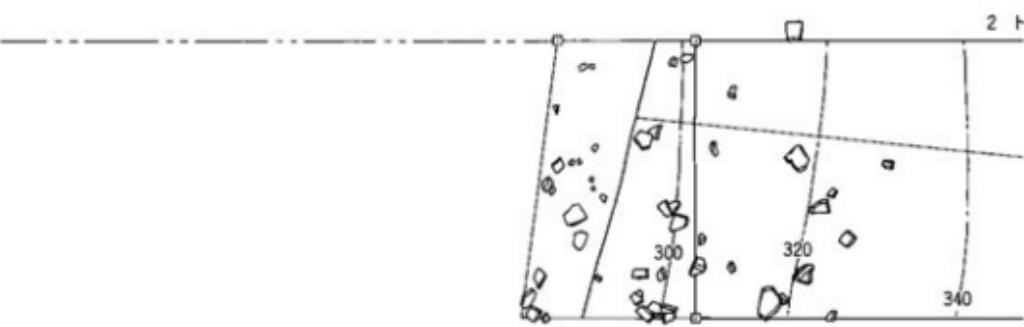
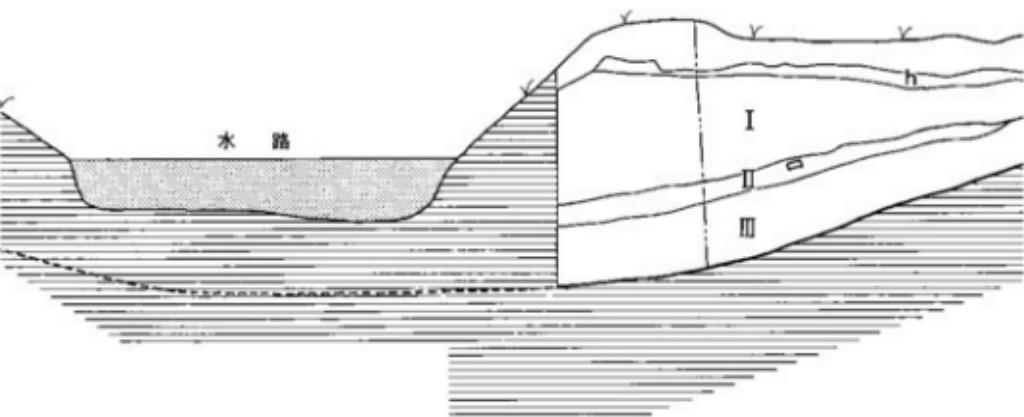




- | | | | |
|----|----------|------|----------|
| a層 | 黒褐色土層 | I層 | 灰褐色粘質土層 |
| b層 | 暗灰色砂質土層 | II層 | 青灰色粘質土層 |
| c層 | 茶褐色硬粘質土層 | III層 | 灰茶褐色砂質土層 |
| d層 | 灰色粘質土層 | | |
| e層 | 黒灰色粘質土層 | | |
| f層 | 暗灰色粘質土層 | | |
| g層 | 淡暗灰色粘質土層 | | |
| h層 | 灰茶色硬質土層 | | |



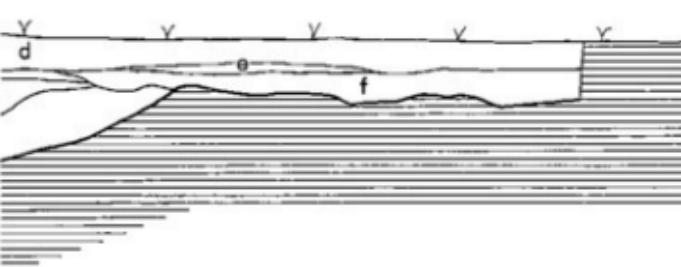
第12図 1・2トレンチ土層断面図



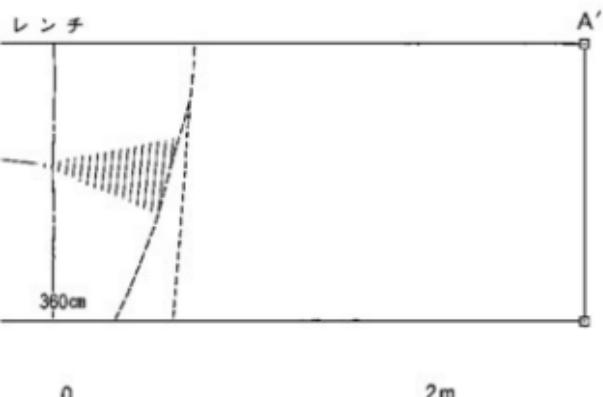
A'

標高

— 5 m



— 2 m



第2節 周濠の調査

た、1トレンチ墳丘側には、灰黄褐色粘質土層の上面である標高4.1mの上に厚さ10cmの黒褐色粘質土層がみられるが、これは古墳築造前の表土層と考えられる。さらにその上に暗褐色でやや粘質の土層の一部が確認できるが、これは墳丘の盛り土と考えられる。

周濠の埋土は、3層に分けられる。上層から順にI～III層とする。I層は、灰褐色粘質土層で、厚い所は70cm程ある。II層は、青灰色粘質土層で、1トレンチ部分には堆積しておらず、2トレンチ部分でも中央部側に堆積がみられ、厚さ10～15cm程の泥炭質の層である。III層は、灰茶褐色砂質土層で、周濠の線に沿って厚さ35cm程度で均等に堆積している。

平成4年度の宅地部分の調査で、D区東側の埋土の断面を観察した結果は、第13図に示した通りである。

この部分の周濠は、2トレンチ部分より深く掘られている。周濠の外側は、標高3.7mから掘り込みが確認でき、上端は緩やかであるが、すぐ約40度のやや急な角度の傾斜になって、1.6m行った所から、約20度の傾斜になり、65cm行った所で周濠底に至っている。周濠底にレベルは、標高2.45mである。従って、この部分の周濠外側から周濠底までの深さは、1.25mである。

次に周濠の地山を見ると、上部には1・2トレンチで確認された層と同じ暗灰色砂礫層があり、標高約2.9mの深さまで続いているが、その下方は異なった層がみられる。すぐ下は青灰色砂層が35cm程の厚さみられ、さらにその下方に黄褐色砂層が確認された。

周濠の埋土は、細かく分層したが、巨視的にみるとI～IV層に分けられる。このうちI～III層は1・2トレンチのI～III層に対応するとみてよいが、IV層は対応する層がみられなかった。ただし、1・2トレンチのIII層はやや砂質であるのにD区のIII層はやや粘質であり、またD区IV層はやや砂質という違いがあるので、1・2トレンチのIII層の時期がD区のIII・IV層に対応する時期と考えたがよいのではなかろうか。

3 周濠の形状と規模

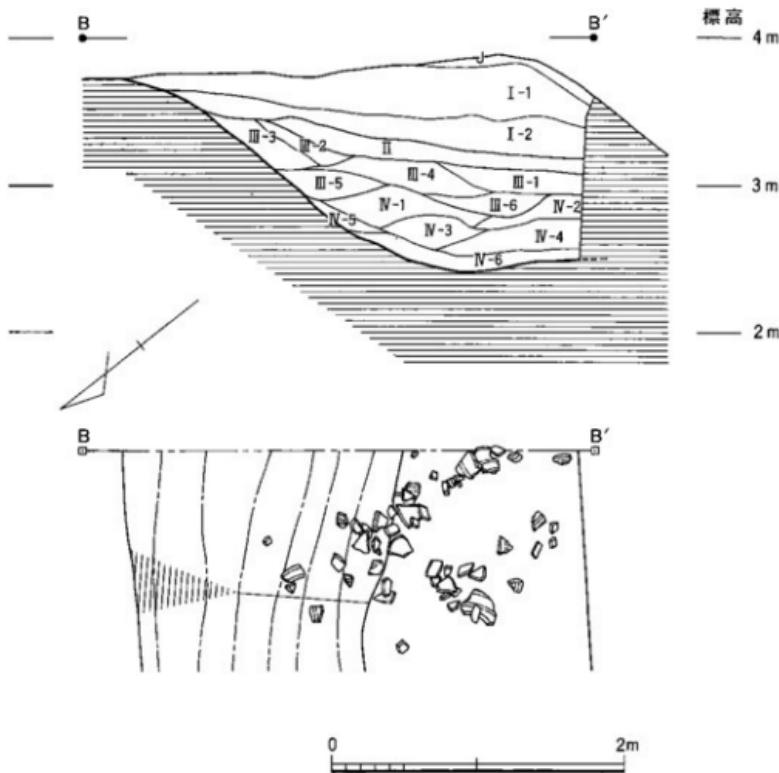
今回の調査で、後円部における周濠の形状と規模を、ほぼつかむことができた。

1・2トレンチの調査によって、幅は10.5m余り（もとは11m程あったと考えられる）で、深さは1.3m余りの、割合浅くて幅広の周濠であることがわかった。

また、第11図にみるように、確認した周濠約25mの範囲のうち、A区からC区までの約15mは、2トレンチの周濠の形状とほぼ同じであるが、D・E区の約10mは、急に深くなっている。周濠底のレベルで比較すると35cm程の差があり、特にC区の東端は一度浅くなって、D区で急に落ち込んでいるので、約60cmの段差がついている。このことから、周濠の深さが部分によって異なることがわかった。

この古墳は、昭和42・43年度の調査の結果では、前方部東側にのみ周濠のある特異な古墳と

- J層 授乱層
- I層 灰褐色粘質土層
1. 固くしまりがある。暗茶褐色の粒子
状鉄分を多量に含む。
 2. 1よりやや鉄分が多い。挙大の河石
を多量含む。
- II層 青灰色粘質土層
- 挙大の河石を少量含む。暗茶褐色の鉄
分を含んだ帯が部分的にみられる。
- III層 灰茶褐色土層(粘質)
1. 淡青灰色に近い灰茶褐色土。鉄分を
含んだ帯が部分的にみられる。
 2. やや砂質に近く、鉄分が多い。
 3. やや砂質。2より黒っぽい鉄分を含
- IV層 青灰色粘性砂質土層
1. やや砂質であるが粘性が強い。
 2. 1よりやや青味が強い。
 3. 1・2より鉄分が少なく、砂を含む。
 4. 暗黒灰色粘質土。
 5. 青灰色砂質土。1~2cm大の小石を
含む。
 6. 明青灰色土。1~3cm大の小石と黄
褐色の砂を少量含む。



第13図 D区東側土層断面図

第3節 周濠の遺物

結論づけられていたが、今回の調査で、後円部にも周濠があることが確認された。また、昭和31年の蓑田鶴男氏の測量図（第5図）や、昭和42・43年度の調査の際にくびれ部西側で「墳裾から西に約10mにわたって周辺地形よりやや低」い所があり「その部分に埴輪・須恵器の小破片の混入が認められた」ということから、周濠はほぼ全周していたものと考えられる。その周濠の幅は10～11mであったとみられる。また周濠がなかったというくびれ部東側が、陸橋があったところと考えられる。

第3節 周濠の遺物

今回調査した周濠から、多数の埴輪の破片と、それに混じって少量の須恵器と土師器の破片及び牛の歯3点が出土した。また、II・III・IV層には木片数点が含まれていたが、加工の痕跡は見られず浮遊木と考えられた。以下、各遺物の出土状態と遺物の観察結果について述べることにする。

1 墓 輪

（1）埴輪の出土状態

埴輪の破片は、総数1000点程（記録して取り上げたのは916点）が出土した。1トレンチから2点、A区から73点、B区から114点、C区から185点、D区から227点、E区から312点以上（調査途中、壁面が崩れ、一括で取り上げたものを含んでいないため）が出土しており、西から東の方へ順次出土量が多くなっている。一方、1トレンチの出土量からみると、墳丘側からの出土は少ない。

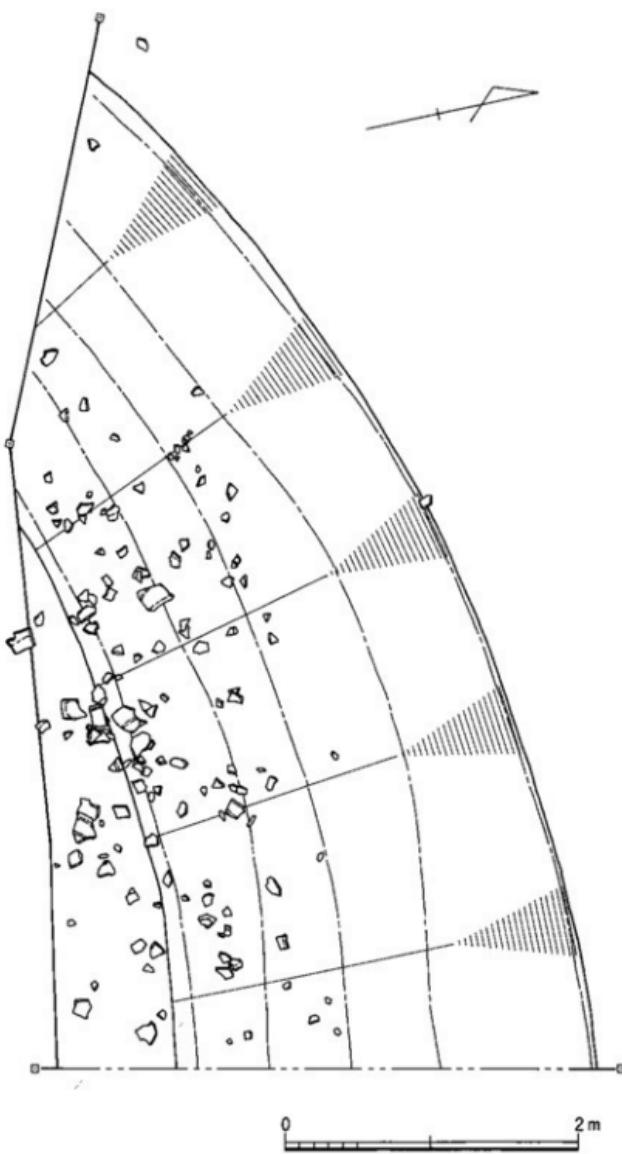
A区（第14図）では、I層から10点、II層から30点、III層から33点、合計73点が出土している。出土状態は、周濠の渕の方には少なく、内側に向かって量が増え、破片も大きくなっている。側面観察では、周濠の傾斜に沿うような状態で出土している。

B区（第15図）では、I層から35点、II層から50点、III層から29点の合計114点が出土している。この区では、周濠の法面上からの出土が多く、周濠底からはあまり出土していない。

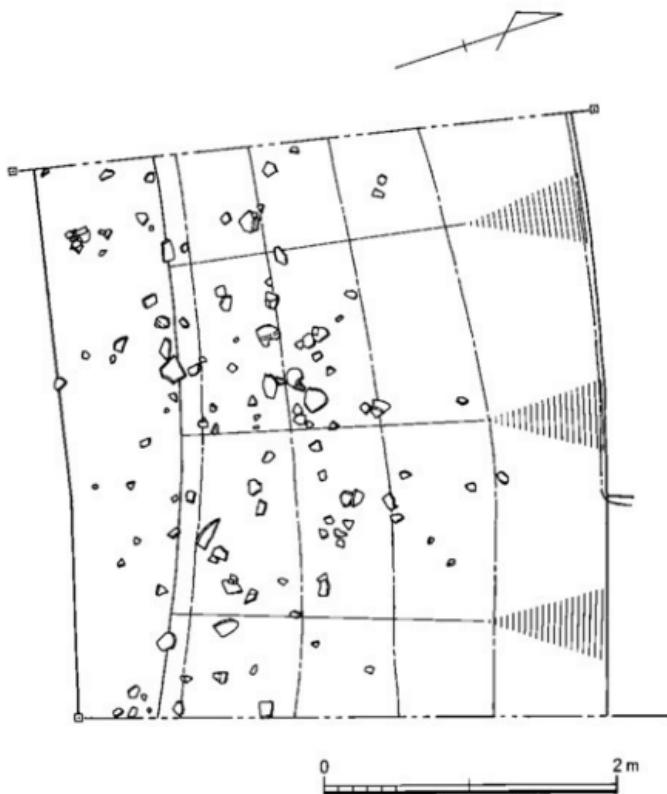
C区（第16図）では、I層から63点、II層から52点、III層から72点の合計187点が出土しており、周濠法面中程から周濠底にかけて割合大きな破片がみられた。

D区（第17図）では、I層から31点、II層から22点、III層から123点、IV層から51点、合計227点が出土している。周濠法面の内側寄りと周濠底の数カ所に破片の集中した所がみられる。いずれの破片も、周濠の傾斜に沿って、傾いた状態で出土した。

E区（第18図）では、I層から19点、II層から14点、III層から242点、IV層から38点の313点



第14図 A区遺物出土状態図

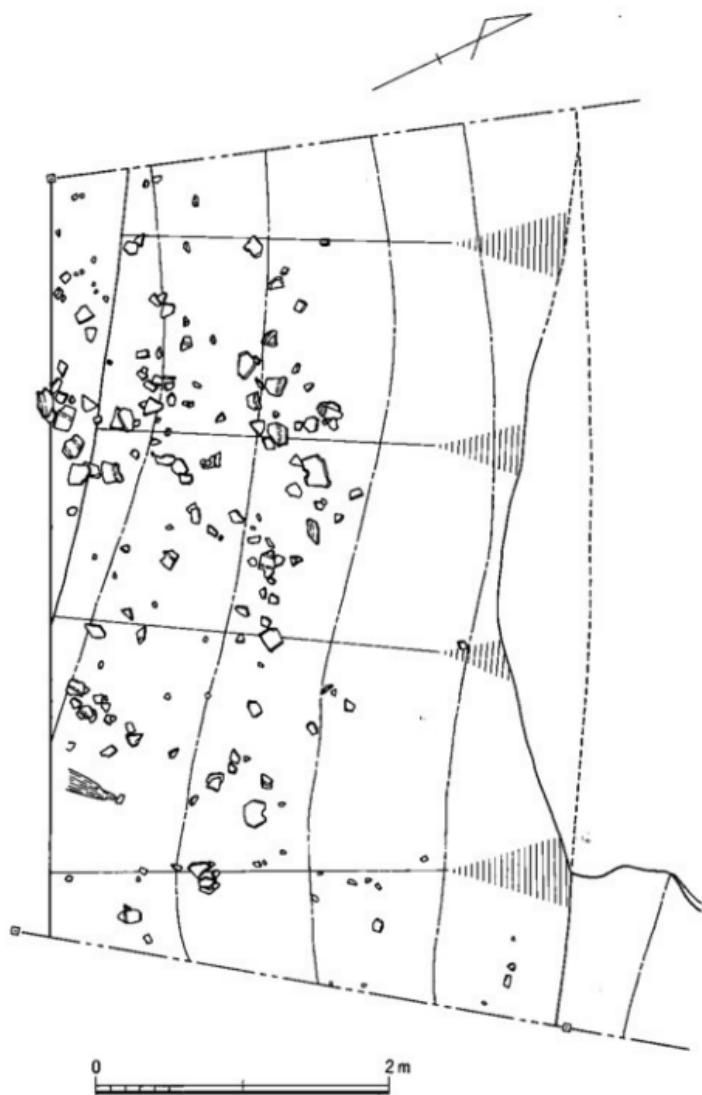


第15図 B区遺物出土状態図

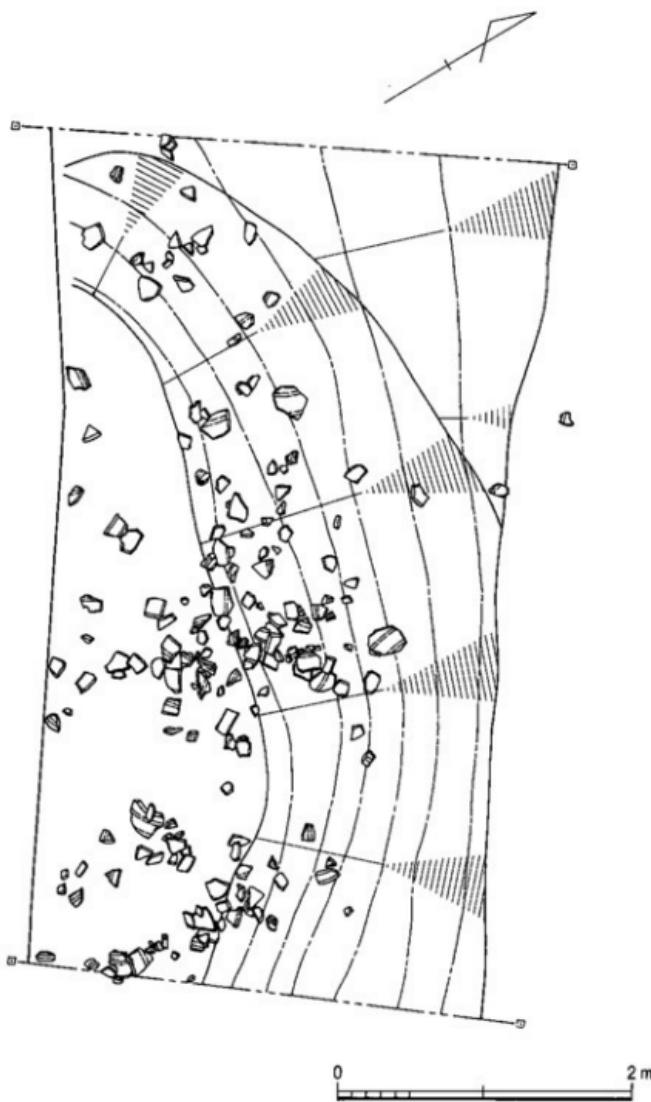
を記録して取り上げた。D区と同様に濃密に出土しており、特に深いレベルからの出土が多かった。

以上、出土状態を見てきたが、埴輪は各層から出土しており、特に下層から多く出土している。また、周濠の傾斜に沿って、周濠の外側から転落したような状態で出土しており、周堤帯の上に立てられていた可能性もある。

埴輪の破片の接合状態を平面的にみると、C・D・E区から出土した最大9.4m離れた地点での接合例が1例あるが、殆んどは同一区内、又は隣接区での接合であり、もと立てられていた所の近くに埋没したものと考えられる。また、層位でみると、層の違いと無関係に接合しているところから、層位の違いはその破片の周濠内への転落時期の差を示すものと考えられる。



第16図 C区遺物出土状態図



第17図 D区遺物出土状態図



第18図 E区遺物出土状態図

なお、埴輪が周濠に転落した年代は、後述するように、共伴した須恵器の年代から8世紀後半と考えられる。

(2) 塩輪の観察

出土した埴輪の破片を接合し、主要なもの82点について実測を行い、観察をした（第2～4表）。うち27点は円筒埴輪の破片（第19～22図）で、9点が朝顔形埴輪の破片（第23・24図）、残り46点もどちらかの破片（第25～29図）である。なお、その他に形象埴輪は出土しなかった。

円筒埴輪は、完形に復元できたものはないが、昭和42・43年度の調査の際に出土した完形に近い資料や、今回出土した破片から考えて、全体像を知ることはできる。

形態的な特徴は、5段で4突帯をもち、第2段目と第4段目に同一方向に穿孔された円形のスカシを2個ずつもち、第3段目にそれらと直交する方向に同様なスカシを設けていることがある。

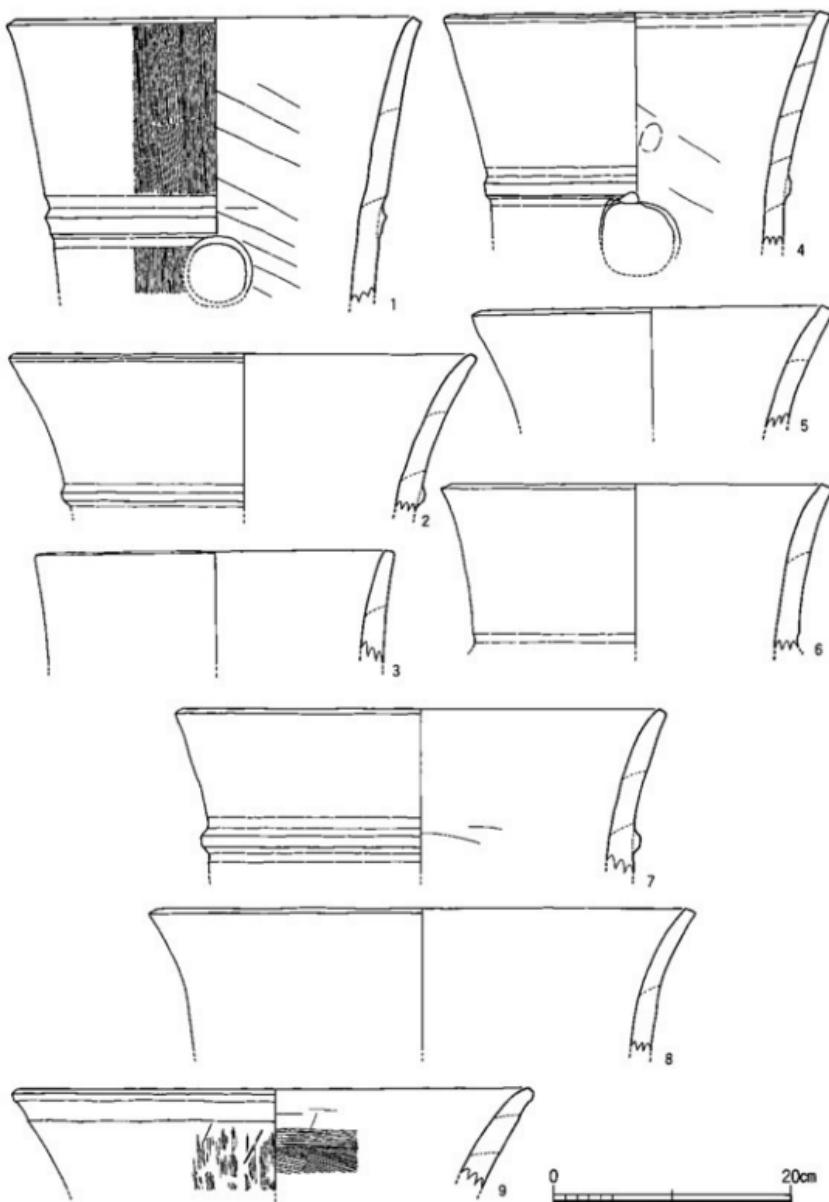
円筒埴輪の基部は、底部より垂直に立ち上がるものと、開きぎみのものがあり、復元底径は計測した26点（朝顔形埴輪の基部も含む）についてみれば、22～30cmの間に収まる。腹部は、垂直に立ち上がるものもあるが、やや上方が開きぎみのものが多い。口縁部は、ゆるやかに外反し、計測した14点の復元口径は30～47cmであった。全体の高さは、55～65cmと推定される。

製作技法をみると、個体によってかなりの違いがあり、複数の工人が製作したことを物語っている。基部は、成形にあたって最初に幅8～10cmの粘土紐によって底部径を決定し、その上にはやや幅の狭い4～8cmの粘土紐を積み上げている。この場合、輪積みにより積み上げるものと、巻き上げているものがあるようである。また、粘土紐の幅の違いも、工人の違いを示していると考えられる。なお、製作中に底部が自重でつぶれたものや、持ち上げた時に歪んだものもある。その他、乾燥させる際の敷き物の棒状圧痕の付いた底部もみられる。

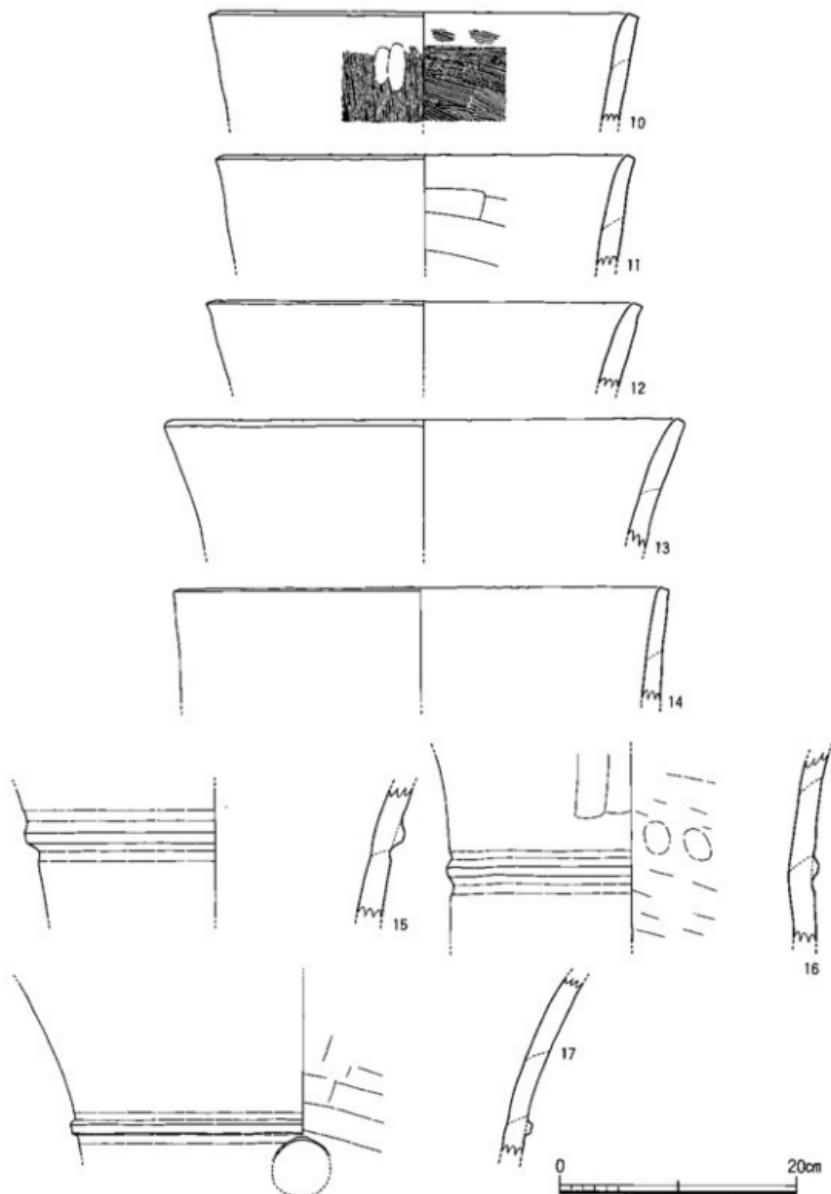
器壁内面の調整は、ヘラケズリの残ったものもあるが、ヘラケズリのあと手の平でナデ調整したものが多く、ハケ調整のあとナデ調整した例もみられる。また、ユビの痕の明瞭なユビナデ調整も多くみられ、基部内面や突帯部の内部にはユビの圧痕もみられる。口縁部付近の調整は、丁寧にナデ調整したものが多いが、一部に細かいハケ目の残ったものもある。

外面の調整は、殆んどナデ調整しているが、一部にハケ調整のあとナデ調整したもの、細かいハケ目の残るものもある。

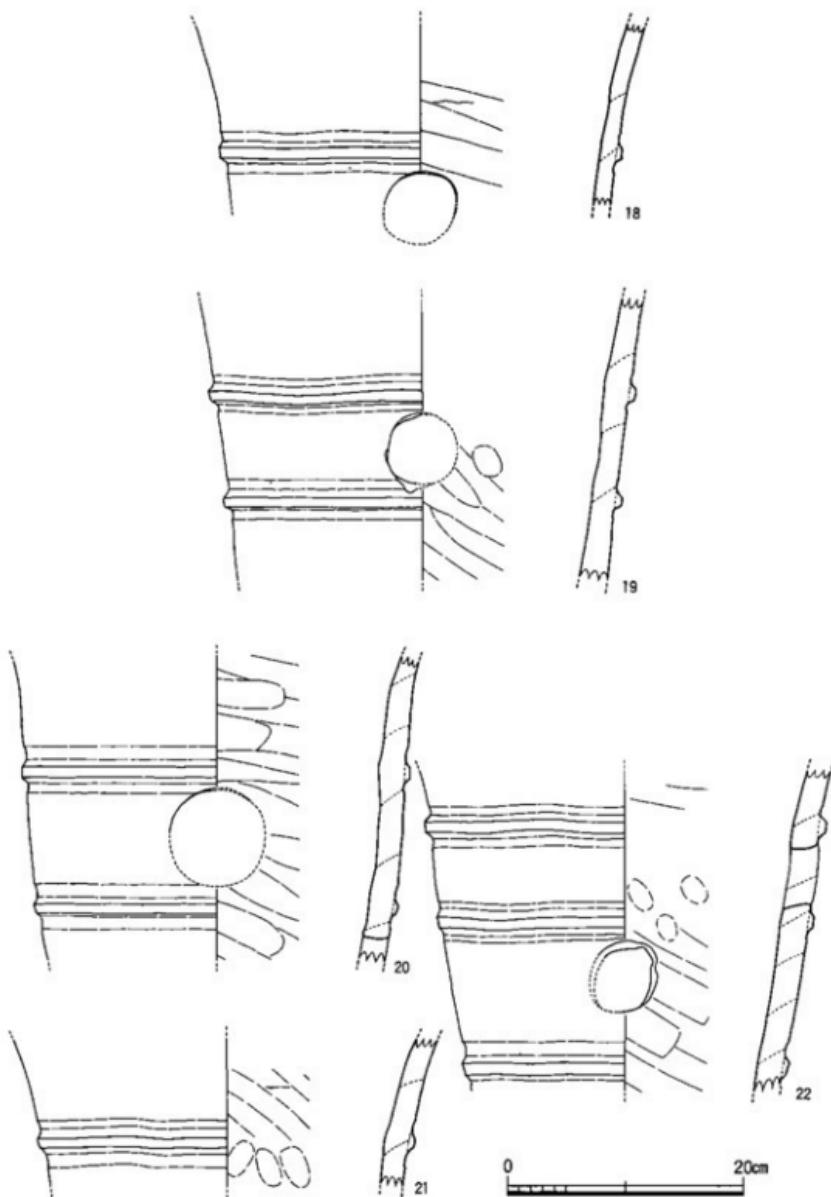
突帯は、4条あるが、同一個体における突帯の形状は同じであるが、別の個体については違ひがみられる。すなわち、断面形が、台形を成すもの、崩れたM字形を成すもの、カマボコ形に近いものがあり、それぞれ突出度の高いものと低いものがある。また、突帯の上端が高いものと下端が高いもの、同じ高さのものがある。全体的にみると、崩れたM字形で、突出度の低いものが多い。なお、突帯の上下は、突帯を貼り付けた際に強くユビでナデしているので、窪みがみられる。



第19図 塩輪実測図（1）

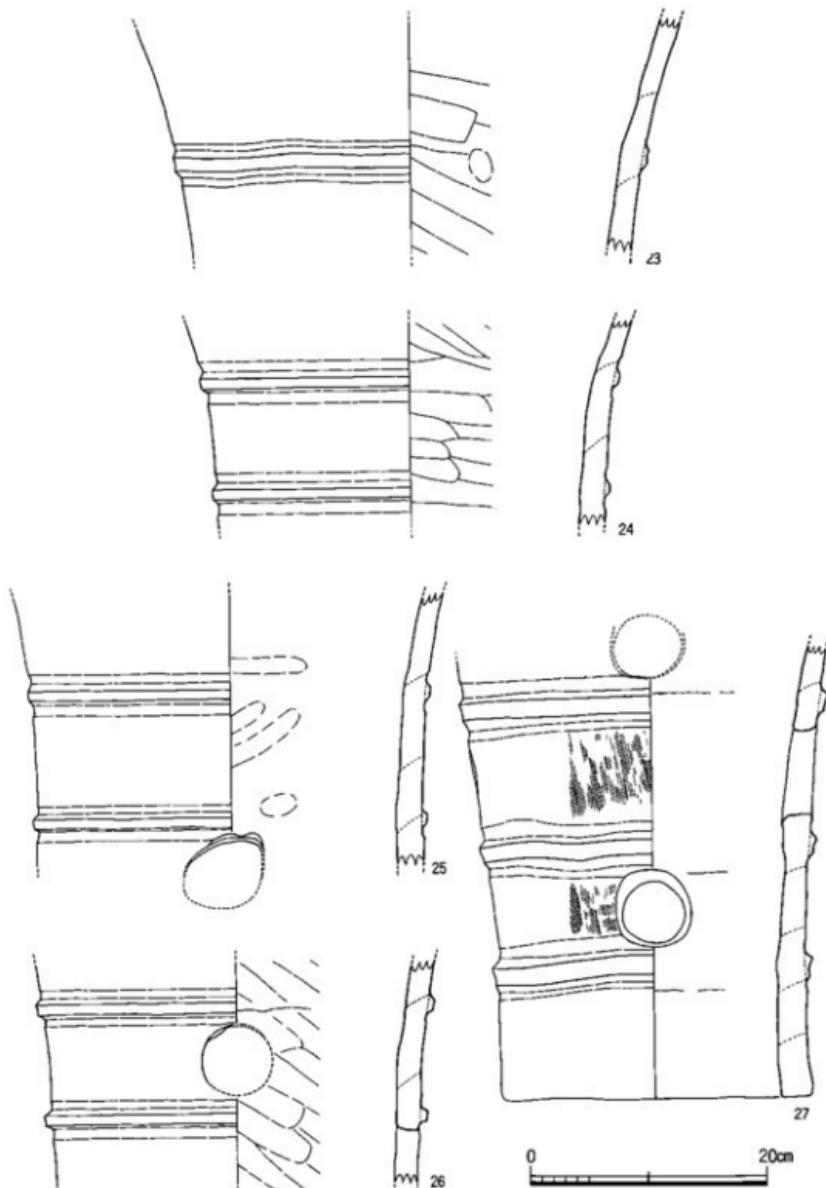


第20図 墓輪実測図（2）



第21図 墓室実測図(3)

第3節 周濠の遺物



第22図 塗輪実測図（4）

第IV章 調査の成果

第2表 塙輪観察表（1）円筒埴輪

No.	辨団番号	出土地区	現在高(cm)	径(cm)	器壁厚(cm)	粘土量(cm)	突 き 等	外側調整	内側調整	胎土	焼成	色調	
							面倒幅(cm)	底面幅(cm)	高さ(cm)				
1	第19図	D区	23.9	口径 35.2	1.3~ 2.0	7.5~ 8.0	1.4~ 1.5	2.3~ 2.6	0.5	ハケ調整	ヘラナデ調整	石英・長石 粒を混入	白褐色
2	*	C区	13.1	口径 39.7	1.4~ 2.0	5.5	0.8	2.0	0.5	ナデ調整	ナデ調整	*	やや良 赤褐色
3	*	E区	9.4	口径 36.5	1.2~ 2.0	4.5	—	—	—	ナデ調整	ナデ調整	*	良 明褐色
4	*	D区	19.4	口径 32.6	1.2~ 1.8	4.0~ 4.5	0.9~ 1.1	1.9~ 2.1	0.4	ナデ調整	ナデ調整	*	良 暗褐色
5	*	A区	10.1	口径 30.4	1.2~ 1.7	5.0	—	—	—	ナデ調整	ナデ調整	*	良 茶褐色
6	*	A区	13.8	口径 33.2	1.1~ 1.9	6.0~ 8.0	—	—	—	ナデ調整	ナデ調整	*	良 茶褐色
7	*	D区	13.8	口径 41.6	1.5~ 2.3	4.5~ 5.5	1.0	2.1	0.5	ナデ調整	ナデ調整	*	やや良 赤褐色
8	*	A区	12.0	口径 46.4	1.1~ 1.8	7.5	—	—	—	ナデ調整	ナデ調整	*	良 暗茶褐色
9	*	D区	8.5	口径 44.4	1.5~ 2.2	3.0~ 3.5	—	—	—	ハケ調整のあと ナデ調整	ハケ調整のあと ナデ調整	*	良 赤褐色
10	第20図	D区	9.3	口径 36.6	1.4~ 1.5	4.5	—	—	—	ハケ調整	ハケ調整	*	良 白灰褐色
11	*	B区	9.3	口径 35.8	1.2~ 1.8	6.0	—	—	—	ナデ調整	ヘラケズリ	*	良 灰茶褐色
12	*	A区	7.1	口径 37.2	1.4~ 2.7	7.0	—	—	—	ナデ調整	ナデ調整	*	良 やや灰茶褐色
13	*	不明	11.0	口径 44.5	1.5~ 1.7	5.0~ 6.5	—	—	—	ナデ調整	ナデ調整	*	やや良 明褐色
14	*	A区	9.6	口径 42.2	1.1~ 1.8	5.5	—	—	—	ナデ調整	ナデ調整	*	良 明褐色
15	*	C区	10.9	上端径 33.8	1.8~ 2.2	5.5	0.9	2.7~ 2.8	0.7	ナデ調整	ナデ調整	*	良 赤褐色
16	*	E区	16.0	上端径 33.4	1.7~ 2.1	6.5	0.6~ 0.9	1.7~ 2.2	0.6	ナデ調整 一部ヘラナデ調整	ナデ調整	*	良 やや灰茶褐色
17	*	D区	15.1	上端径 45.2	1.5~ 1.8	6.0	0.8	1.3~ 1.4	0.5	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	*	やや不良 暗褐色
18	第21図	D区	15.2	上端径 38.3	1.3~ 1.5	5.0	0.8~ 0.9	1.8~ 2.0	0.5	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	*	やや不良 暗褐色
19	*	C区	23.5	上端径 37.6	1.8~ 2.4	5.5	0.8~ 0.9	1.7~ 1.9	0.6	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	*	やや良 茶褐色
20	*	C区	25.6	上端径 34.5	1.6~ 2.2	4.5~ 5.5	0.8~ 0.9	1.6~ 2.0	0.4~ 0.5	ナデ調整	ヘラケズリ	*	やや良 茶褐色
21	*	B区	12.7	上端径 36.0	1.8~ 2.1	5.5	0.8	1.9~ 2.3	0.5	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	*	良 茶褐色
22	*	D区	27.0	上端径 35.0	1.9~ 2.4	3.0~ 5.0	0.8~ 1.0	2.0~ 2.3	0.4~ 0.6	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	*	不良 暗褐色
23	第22図	B-E区	19.5	上端径 45.2	1.5~ 2.0	6.5~ 7.0	1.1	2.3~ 2.4	0.4	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	*	良 茶褐色
24	*	E区	17.3	上端径 38.0	1.5~ 2.1	4.0~ 6.0	0.8~ 0.9	1.6~ 1.8	0.5	ナデ調整	ヘラケズリ	*	やや良 赤褐色
25	*	E区	22.8	上端径 36.6	1.6~ 2.4	5.0~ 6.5	0.8	1.4~ 1.8	0.4	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	*	良 赤褐色
26	*	C区	18.8	上端径 34.0	1.9~ 2.1	6.0	0.8~ 0.9	1.6~ 1.7	0.5~ 0.7	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	*	やや良 茶褐色
27	*	E区	38.0	底径 26.2	1.8~ 2.5	4.5~ 5.0	1.2~ 1.7	2.2~ 2.9	0.7	ハケ調整のあと ナデ調整	ナデ調整	*	茶褐色～ 明褐色

スカシは、円形で、穿孔の前に穿孔位置に目印を付けていたとみられ、第27図58には目印とみられる沈線の円弧が残っている。スカシの孔の直径は、殆んどが直径5~6 cm以内に収まっている。

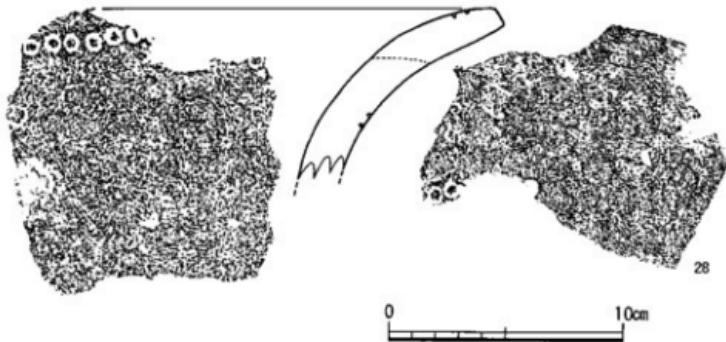
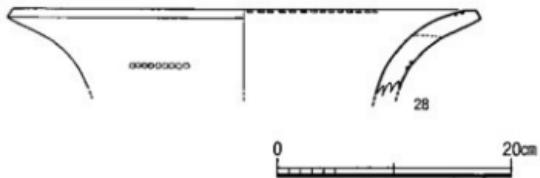
胎土は、肉眼観察によると、石英や長石とみられる白石の岩石を碎いたものを粘土に混入させており、1 cm程の大粒の石を含んだものもある。

焼成は、殆んどが良好で、色調は、赤褐色や茶褐色を成すものが多く、黒斑のあるものはみられない。

第3節 周濠の遺物

第3表 塙輪観察表(2) 朝顔形埴輪

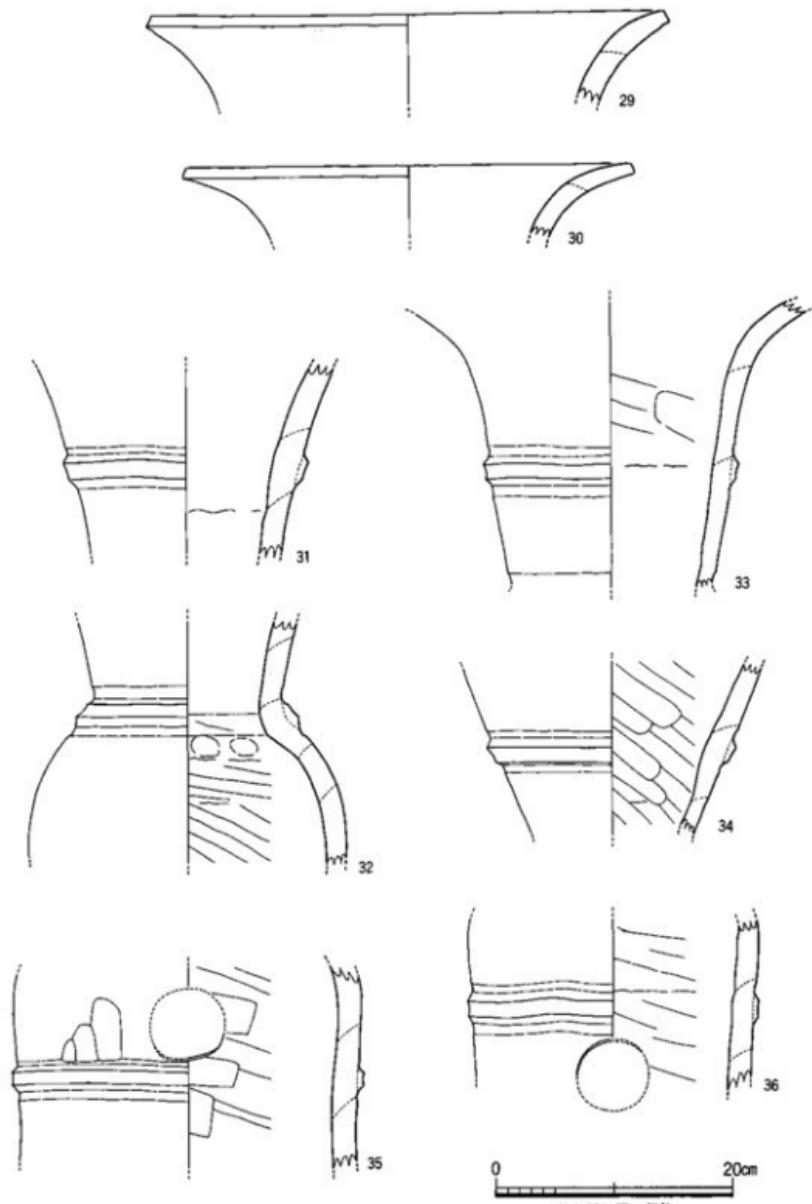
No.	標因番号	出土地区	現存高(cm)	径(cm)	器壁厚(cm)	粘土筋幅(cm)	突帯	外側調整	内側調整	胎土	焼成	色調
							頂部幅(cm)	基部幅(cm)	高さ(cm)			
28	第23回	D区	7.1	口径 40.6	1.3~ 5.0	1.8	—	—	—	ナデ調整	ナデ調整	石英・長石 粒を混入
29	第24回	D区	7.5	口径 44.6	1.5~ 2.0	5.5	—	—	—	ナデ調整	ナデ調整	良 暗茶褐色
30	+	B区	6.1	口径 38.4	1.2~ 1.7	5.5	—	—	—	ナデ調整	ナデ調整	良 赤褐色
31	+	D区	16.0	上端径 25.2	1.9~ 2.3	5.5	1.5	2.9~ 3.3	0.6	ナデ調整	ナデ調整	やや良 暗茶褐色
32	+	D区	20.3	頭部径 27.0	1.7~ 2.0	3.5~ 5.0	1.2~ 1.4	2.4~ 2.8	0.5	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	やや良 暗茶褐色
33	+	C区	23.8	上端径 33.0	1.4~ 1.8	7.5~ 10.0	1.2	2.5~ 2.7	0.6	ナデ調整	ナデ調整	良 茶褐色
34	+	D区	14.2	上端径 25.2	1.3~ 1.9	6.0	1.3~ 1.5	2.4~ 2.7	0.6	ナデ調整	ヘラケズリ	良 茶褐色
35	+	B区	17.2	頭部径 25.6	1.9~ 2.2	6.0	1.1	2.2~ 2.4	0.5	ナデ調整 一部ヘナデ調整	ヘラケズリ	良 灰茶褐色
36	+	D区	14.4	頭部径 24.6	1.6~ 1.9	6.0	1.3~ 1.4	2.6~ 3.2	0.5	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	良 暗茶褐色



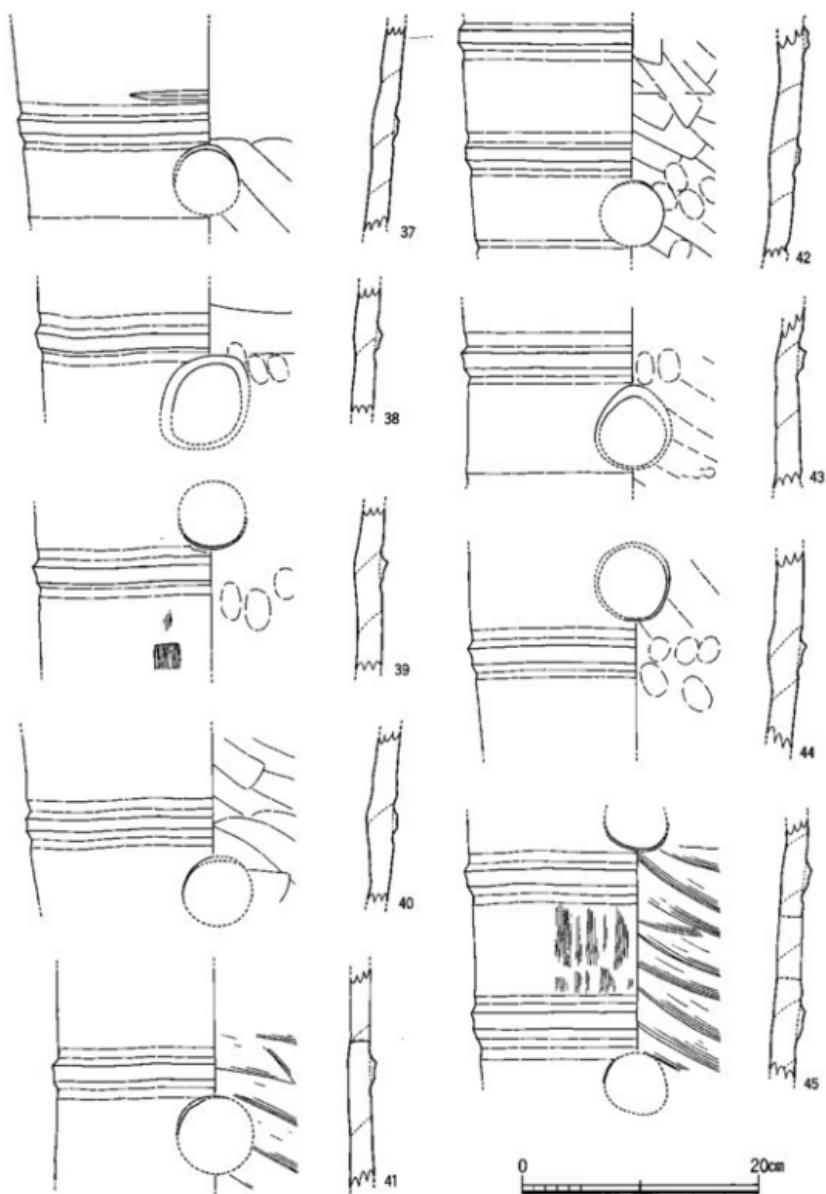
第23図 塙輪実測図(5)

朝顔形埴輪は、円筒埴輪に比べると出土点数が少ない。完形に復元できたものはないが、円筒埴輪と同様、昭和42・43年度の調査で出土した資料と、今回出土した破片(第23・24回)から、全体形を知ることができる。

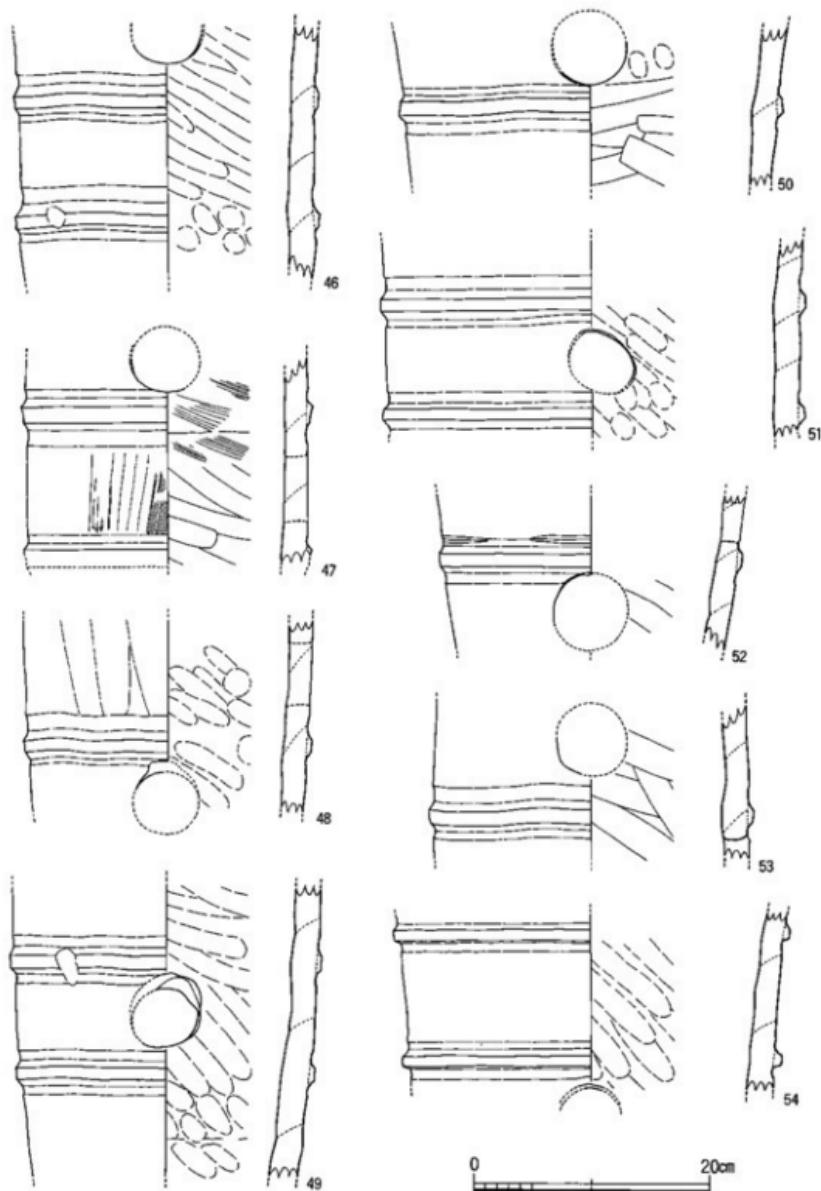
形態的な特徴は、基部から垂直に立ち上がった円筒部は、5段4突帯に作られ、肩部は丸く、頸部はやや外開きに真っすぐ長く伸び、口縁部は大きく外反していることである。肩部と頸部



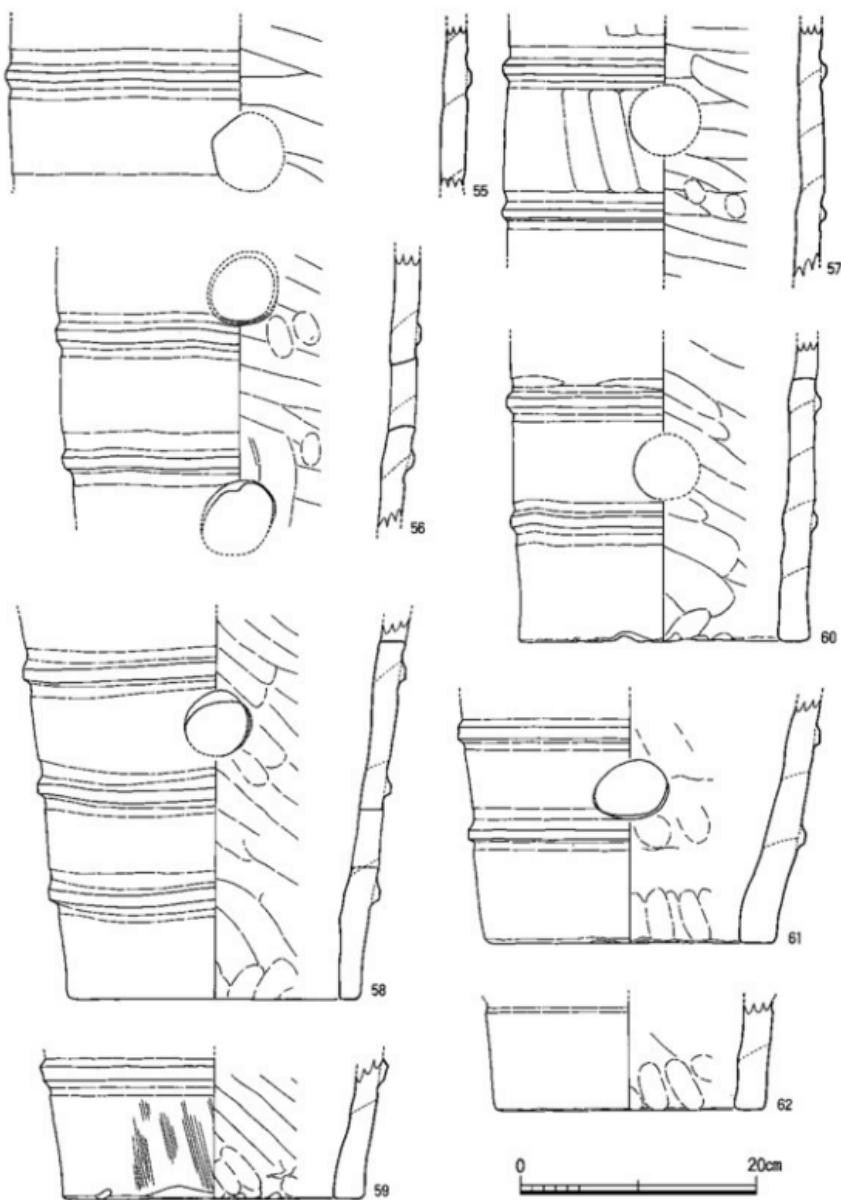
第24図 埴輪実測図（6）



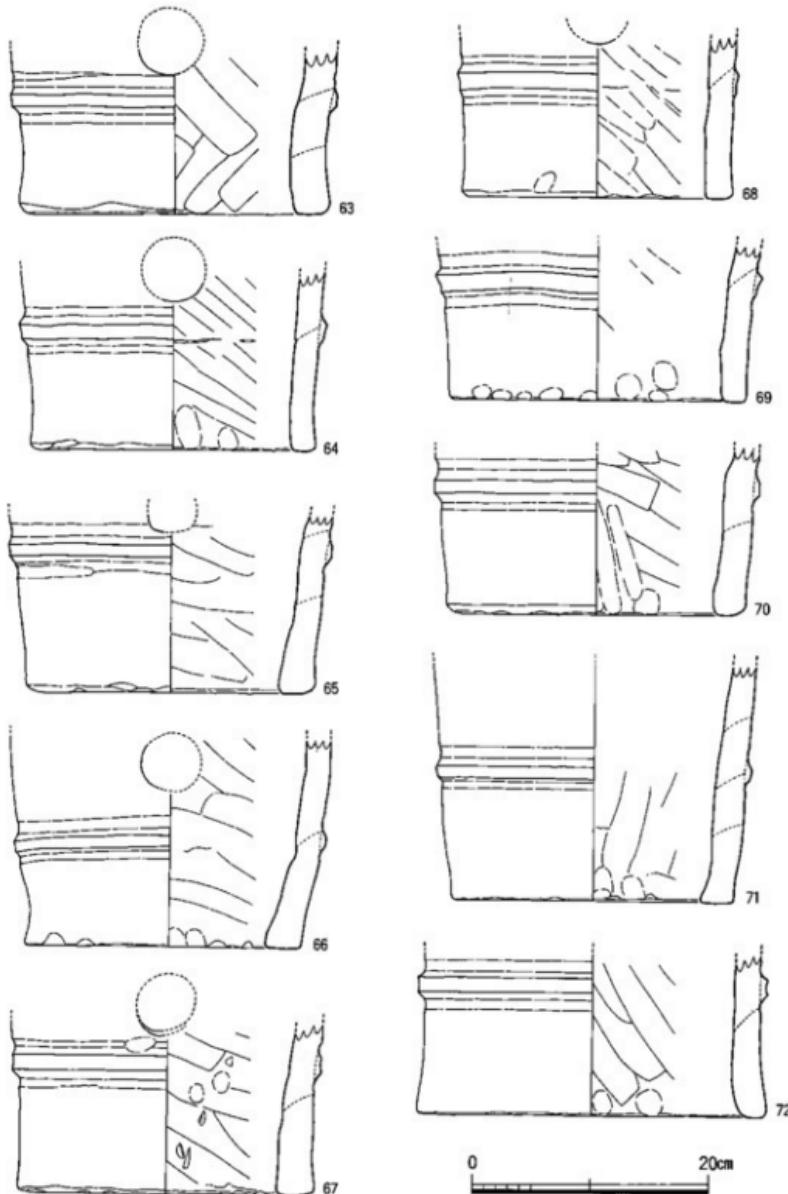
第25図 墓輪史測図（7）



第26図 墓輪実測図(8)

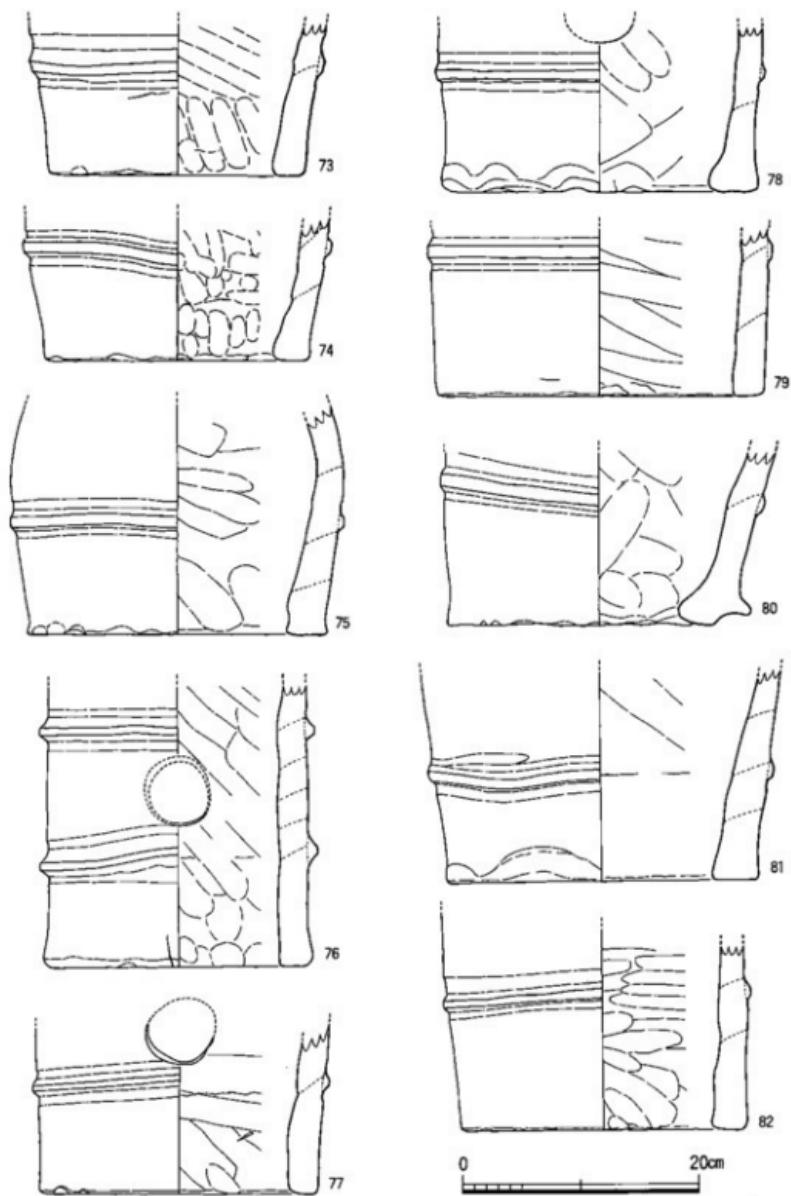


第27図 塗輪実測図（9）



第28図 墓輪実測図 (10)

第3節 周濠の遺物



第29図 塩輪実測図 (11)

第IV章 調査の成果

第4表 塗輪調査表(3)円筒埴輪・朝顔形埴輪

No.	擇図番号	出土地区	現存高(cm)	径(cm)	器壁厚(cm)	粘土幅(cm)	突 帽			外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調
							頂部幅(cm)	底部幅(cm)	高さ(cm)					
37	第25回	D-E区	17.3	上端径 33.5 上端厚 2.0	1.6~ 1.8~	4.0~ 5.0	1.1	2.4	0.4	ナデ調整	上部ナデ調整 下部ヘラケズリ	石素・良石 粒を混入	良	灰茶褐色
38	x	EIK	10.5	上端径 29.1 上端厚 2.0	1.8~ 2.0	5.0	1.2~ 1.4	2.2~ 2.4	0.5	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	x	良	白灰褐色
39	x	EIK	13.6	上端径 29.8 上端厚 2.2	1.9~ 1.6~	4.5	1.4~ 1.0	2.4~ 2.3	0.6	ナデ調整 一部ナデ調整	ナデ調整	x	良	やや暗茶褐色
40	x	EIK	14.4	上端径 32.2 上端厚 2.2	2.2	7.0	1.0	2.3~	0.4	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	x	良	やや暗茶褐色
41	x	DK	18.7	上端径 26.6 上端厚 2.0	1.6~ 2.0	5.0~ 7.5	1.2~ 1.4	2.6~ 2.7	0.5	ナデ調整	ハケ調整	x	良	茶褐色
42	x	EIK	19.6	上端径 28.8 上端厚 2.3	1.9~ 2.3	5.0	1.1	2.3~	0.4	ナデ調整	ヘラケズリ	x	良	茶褐色
43	x	EIK	15.3	上端径 29.0 上端厚 2.1	1.8~ 2.1	5.5	1.3~ 1.4	2.6	0.6	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	x	良	やや暗茶褐色
44	x	EIK	16.8	上端径 28.4 上端厚 2.4	2.0~ 2.4	5.0~ 7.0	1.3~ 1.5	2.7~ 2.8	0.5	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	x	良	赤褐色~ 暗茶褐色
45	x	DK	21.9	上端径 28.9 上端厚 2.2	1.8~ 2.0	5.0~ 6.0	1.4	3.6	0.5	ハケ調整のあと ナデ調整	ナデ調整	x	良	茶褐色
46	第26回	D-E区	21.2	上端径 24.2 上端厚 2.3	2.0~ 2.3	5.0~ 5.5	1.0~ 1.1	2.1~ 2.5	0.5	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	x	良	やや暗茶褐色
47	x	DK	16.3	上端径 23.8 上端厚 2.2	1.9~ 2.2	5.0~ 6.0	1.4	2.7	0.5	ナデ調整	ハケ調整のあと ナデ調整	x	良	暗茶褐色
48	x	EIK	16.1	上端径 24.6 上端厚 2.1	1.9~ 2.1	6.0	1.0	2.1~	0.5	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	x	良	茶褐色
49	x	C-E区	24.5	上端径 26.2 上端厚 2.5	2.1~ 2.5	8.5	1.0~ 1.1	2.1~ 2.3	0.5	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	x	良	暗茶褐色
50	x	D-E区	13.3	上端径 33.6 上端厚 2.1	1.8~ 2.1	6.0	1.2~ 1.3	2.2~ 2.3	0.5	ナデ調整	ヘラケズリ	x	良	灰褐色
51	x	CEK	20.4	上端径 35.7 上端厚 2.2	1.9~ 2.2	5.0	1.0	2.2~ 2.6	0.5~ 0.6	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	x	良	茶褐色
52	x	A-E区	12.9	上端径 26.2 上端厚 2.0	1.6~ 2.0	4.0~ 4.5	1.0~ 1.1	2.0~ 2.3	0.3	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	x	良	茶褐色~ やや暗茶褐色
53	x	EIK	13.0	上端径 26.2 上端厚 2.2	2.0~ 2.2	5.5	1.0~ 1.2	2.0~ 2.5	0.5	ナデ調整	ヘラケズリ	x	良	灰褐色
54	x	DK	15.0	上端径 33.0 上端厚 2.2	1.8~ 2.2	5.5	0.9	1.6~ 1.8	0.5~ 0.6	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	x	中や良	茶褐色
55	第27回	A-E区	13.5	上端径 38.8 上端厚 2.3	1.7~ 2.3	5.5~ 6.0	0.8~ 0.9	2.1~ 2.2	0.4	ナデ調整	ヘラケズリ	x	やや良	明褐色
56	x	DK	23.0	上端径 31.0 上端厚 2.3	2.0~ 2.3	5.0~ 7.0	0.9~ 1.0	1.8~ 2.2	0.4~ 0.5	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	x	やや良	明褐色~ 赤褐色
57	x	A-E区	21.2	上端径 26.5 上端厚 2.2	1.8~ 2.2	4.5~ 5.0	0.7~ 0.9	1.5~ 1.9	0.5	ナデ調整	ヘラケズリのあと ヘラナデ調整	x	良	茶褐色
58	x	CEK	32.0	底径 25.0 底厚 2.5	1.8~ 2.5	8.5~ 11.0	0.8~ 1.2	1.9~ 2.3	0.6	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	x	やや良	赤褐色
59	x	EIK	12.0	底径 25.0 底厚 2.5	2.0~ 2.5	8.0	1.2	2.5	0.5	ナデ調整	ナデ調整のあと ナデ調整	x	良	やや暗茶褐色
60	x	EIK	25.3	底径 24.6 底厚 2.4	1.8~ 2.4	4.0~ 5.5	0.8~ 0.9	1.9~ 2.0	0.4~ 0.5	ナデ調整	ヘラケズリとナデ (ユビナデ) 調整	x	やや良	茶褐色
61	x	DK	20.5	底径 24.8 底厚 3.2	2.0~ 3.2	6.8~ 8.0	0.8~ 1.0	1.8~ 2.0	0.6~ 0.7	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	x	不良	暗褐色
62	x	DK	9.2	底径 23.0 底厚 2.6	2.4~ 2.6	4.0~ 5.0	-	-	-	ナデ調整	ナデ調整	x	良	赤褐色
63	第28回	A-E区	13.7	底径 26.4 底厚 3.2	2.7~ 3.2	4.5~ 5.5	1.0~ 1.1	2.0~ 2.3	0.5	ナデ調整	ヘラケズリ	x	やや良	明褐色
64	x	DK	15.0	底径 24.2 底厚 2.2	2.0~ 2.2	10.0	1.2~ 1.4	2.6~ 2.9	0.5	ナデ調整	ヘラケズリ	x	良	茶褐色
65	x	EIK	14.9	底径 24.6 底厚 3.0	1.9~ 3.0	5.5~ 8.0	1.0~ 1.1	2.2~ 2.3	0.4	ナデ調整	ヘラナデのあとナデ (ユビナデ) 調整	x	良	茶褐色
66	x	EIK	17.6	底径 23.4 底厚 2.5	2.1~ 2.5	9.0	0.9~ 1.0	1.8~ 1.9	0.5	ナデ調整	ヘラケズリのあと ナデ調整	x	やや良	茶褐色
67	x	EIK	14.5	底径 25.2 底厚 2.9	2.4~ 2.2	8.0	1.1~ 1.4	2.5~ 2.8	0.5	ナデ調整	ヘラケズリ	x	良	暗茶褐色
68	x	DK	13.5	底径 23.0 底厚 2.4	2.0~ 2.4	10.0	1.5~ 1.6	2.8~ 2.9	0.5	ナデ調整	ナデ調整 (ヘラナデとユビナデ)	x	やや良	暗茶褐色
69	x	A-E区	12.9	底径 25.2 底厚 2.3	2.1~ 2.5	10.5	1.5~ 1.6	2.5~ 2.6	0.5	ナデ調整	ナデ調整	x	良	明褐色
70	x	EIK	14.0	底径 25.4 底厚 2.5	2.2~ 2.5	7.5	1.1	2.8	0.6	ナデ調整	ヘラケズリ 下部ユビナデ	x	良	茶褐色

第3節 周濠の遺物

No.	鉢番号	出土 地区	現存高 (cm)	径 (cm)	器壁厚 (cm)	粘土紐 幅(cm)	突 帯			外側調整	内側調整	胎土	焼成	色調
							頂部幅 (cm)	底部幅 (cm)	高さ (cm)					
71	第28號	B区	19.7	底径 24.0	2.0~ 2.7	4.0~ 6.0	1.0	2.0	0.5	ナデ調整	ヘラケズリ	石灰・吳石 粒を混入	良	赤褐色
72	+	E区	13.6	底径 29.6	2.1~ 2.6	8.5	1.2~ 1.3	2.4~ 2.5	0.6	ナデ調整	ヘラケズリ	*	良	明褐色
73	第29號	E区	12.8	底径 22.0	1.9~ 2.3	0.9	0.9	2.4~ 2.7	0.6	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	*	良	暗褐色
74	+	C区	12.0	底径 22.7	2.2~ 2.5	4.5~ 5.5	0.9	1.7~ 1.8	0.5	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	*	良	茶褐色
75	+	不明	19.2	底径 25.6	2.3~ 3.5	4.0~ 5.5	0.9	1.6~ 1.8	0.4	ナデ調整	ナデ調整 (ヘラナデ・ユビナデ)	*	良	茶褐色
76	+	D区	23.5	底径 23.0	2.0~ 2.7	2.5~ 9.0	0.6~ 0.7	2.0~ 2.7	0.7	ナデ調整	ナデ調整 (ヘラナデ・ユビナデ)	*	良	暗茶褐色
77	+	A区	14.6	底径 23.7	2.2~ 2.5	9.0	0.5	1.5~ 1.9	0.5	ナデ調整	ヘラケズリ	*	良	赤褐色
78	+	E区	13.8	底径 26.8	2.0~ 2.5	7.5	0.8~ 1.0	1.6~ 1.8	0.4	ナデ調整	ヘラケズリナデ (ユビナデ) 調整	*	良	赤褐色
79	+	E区	14.1	底径 27.8	2.3~ 2.7	6.0	1.0	2.2	0.4	ナデ調整	ヘラケズリ	*	良	反褐色
80	+	D区	14.5	底径 25.0	2.2~ 2.5	4.0~ 11.0	0.9~ 1.0	2.5~ 3.9	0.5	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	*	やや良	茶褐色
81	+	E区	17.6	底径 26.6	1.9~ 3.2	3.5~ 5.5	0.8	1.6~ 1.8	0.5	ナデ調整	ナデ調整	*	やや良	茶褐色
82	+	A区	18.5	底径 24.2	1.9~ 2.7	4.5~ 8.0	0.5~ 0.8	1.5~ 1.7	0.4	ナデ調整	ナデ調整 (ユビナデ)	*	良	茶褐色

の間、頭部と口縁部の間に1条ずつの突帯がある。また、スカシは、円形で、第2段目と第4段目に同一方向に穿孔された2個ずつがあり、それらと直交する形で、第3段目と第5段目に2個ずつみられる。

朝顔型埴輪の大きさは、口径38~44cm、頭部径13~17cm、肩部径24~30cm、底部径22~30cmで、頭部から口縁部までの高さ22~26cm、底部から頭部までの高さ55~65cm、総高65~90cm程度と考えられる。

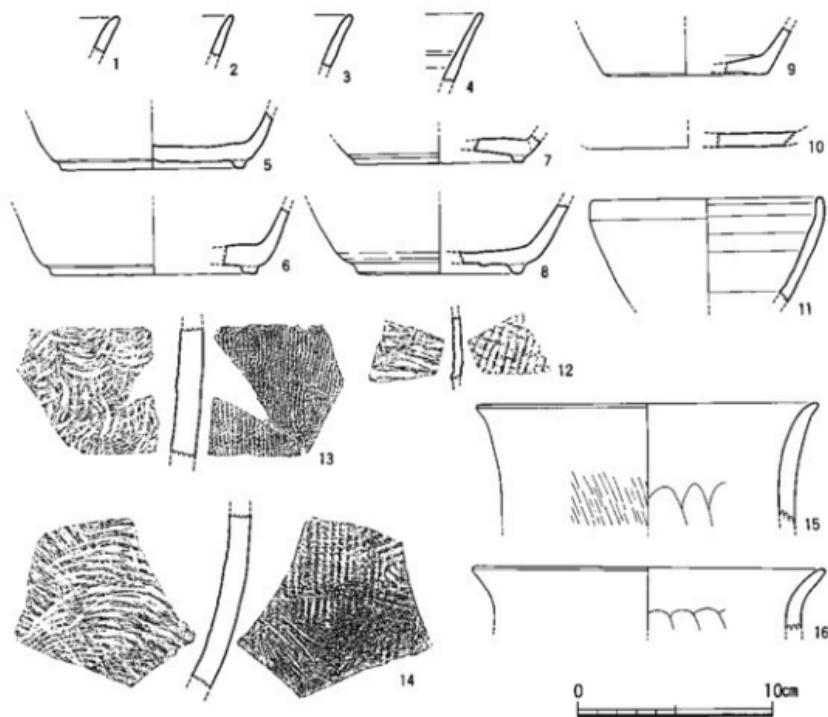
製作技法は、円筒埴輪と共に通するが、頭部から口縁部にかけては、割合幅の広い5~10cmの粘土紐を積み上げている。器壁内外面の調整・胎土・焼成なども円筒埴輪とほぼ同じである。突帯は、実測できたもので見る限りでは、突出度が低く崩れたM字形を成している。

なお、第23図に示した口縁部破片には、口縁部内上面上端と口縁部外面下方に、径約5.7mmの竹管文が施されている。内面のものは連続して施されているものと考えられるが、外面のものは破片内で7cm以上とぎれた部分がみられる。

2 須恵器・土師器

(1) 須恵器と土師器の出土状態

須恵器と土師器の破片は、24点が出土した。出土地点は、A区から10点、B区から7点、C区から6点、D区から0点、E区から2点であった。出土層位をみると、I層から9点、II層から13点、III層から2点出土している。これらの遺物は、周濠の埋没年代を示す資料として非常に重要である。



第30図 須恵器・土師器実測図

(2) 須恵器・土師器の観察

出土した土器のうち、主要な須恵器の破片14点、土師器の破片2点について実測をし、観察を行った（第30図・第5表）。

第30図のうち1～10が、須恵器の壺である。1～4は、壺の口縁部の破片で、いずれも直線的に開き、上端でわずかに外反し、口唇部は丸くなっている。器壁は、内外ともヨコナデで丁寧に仕上げている。

5～8は、高台付壺の底部付近の破片で、底径は8.4～10.6cmである。断面が台形で、低い高台を、底面の端部近くに付けており、器壁はヨコナデで仕上げている。

9と10は、高台のない壺の底部の破片である。9の底径は8.4cm、10の底径は10.0cmで、9は底部の端が角ばっている。器壁はヨコナデで丁寧に仕上げているが、底面のみは回転ヘラ切りの痕が残っている。

第30図11は、須恵器の鉢で、底部は尖底になるものと考えられる。口縁部はいくぶん内弯し、口唇部は丸く、口径は12.0cmである。

第3節 周濠の遺物

第5表 須恵器・土師器観察表

辨認番号	出土地区	種類	現存高(cm)	径(cm)	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調
第1図1	C区	須恵器壺	1.9	—	ヨコナデ	ヨコナデ	白い微粒子を混入	良	灰色
* 2	A区	須恵器壺	2.1	—	ヨコナデ	ヨコナデ	精選	良	白灰色
* 3	A区	須恵器壺	2.7	—	ヨコナデ	ヨコナデ	*	良	白銀灰色
* 4	B区	須恵器壺	3.5	—	ヨコナデ	ヨコナデ	長石・石英細粒子を混入	良	灰色
* 5	A区	須恵器高台付壺	2.9	底径9.4	ヨコナデ	ヨコナデ	精選	良	灰白色
* 6	A区	須恵器高台付壺	3.5	底径10.6	ヨコナデ	ヨコナデ	*	良	灰白色
* 7	C区北方	須恵器高台付壺	1.4	底径8.8	ヨコナデ	ヨコナデ	*	良	白灰色
* 8	E区	須恵器高台付壺	3.5	底径8.6	ヨコナデ	ヨコナデ	長石・石英細粒子を混入	良	灰白色
* 9	B区	須恵器壺	2.4	底径8.4	ヨコナデ底面へラ切り	ヨコナデ	精選	良	灰色
* 10	C区	須恵器壺	0.7	底径10.0	ヨコナデ	ヨコナデ	長石・石英細粒子を混入	良	灰色
* 11	E区	須恵器鉢	5.3	口径12.0	ヨコナデ	ヨコナデ	長石・石英細粒子を混入	良	暗灰色
* 12	C区	須恵器壺	3.3	—	格子タタキ目	同心円文タタキ目	*	良	茶～灰色
* 13	C区	須恵器壺	6.8	—	平行タタキ目	同心円文タタキ目	*	良	白灰色
* 14	B区	須恵器壺	9.0	—	格子タタキ目	同心円文タタキ目	*	良	白灰色
* 15	A区	土師器カメ	6.2	口径17.6	ヨコナデ	ヨコナデとヘラケズリ	長石・石英小粒子を混入	良	暗茶褐色
* 16	A区	土師器カメ	3.1	口径18.1	ヨコナデとハケ目	ヨコナデとヘラケズリ	*	良	暗茶褐色

第30図12～14は、須恵器の壺の胴部の破片である。内面は3点とも同心円文タタキ目がみられ、外面は12と14が格子タタキ目、13が平行タタキ目がみられる。

第30図15と16は、土師器のカメの口縁部付近の破片である。15は、やや不明瞭ではあるが、内面はヘラケズリされて、外面はハケ目調整されている。口縁部はゆるやかに外反して口唇部に至っており、復元口径は17.6cmである。16も内面はヘラケズリされており、口縁部は短かく外反し、復元口径は18.1cmである。

周濠から出土した土器は少数ではあったが、層位による違いは殆んどなかった。この中で、最も年代を示す遺物は、須恵器の高台付壺である。この高台付壺の年代は、諸特徴から8世紀後半の奈良時代末期と考えられる。他の土器もほぼ同年代の遺物と考えることができる。

以上のことから、周濠は、奈良時代末期頃、恐らく周辺開発に伴って徐々に埋没したものと考えられる。

3 牛 齒

(1) 牛齒の出土状態

C区の埴輪の破片の間から、3点の歯が出土した。いずれもⅢ層からの出土で、周濠面から15cm程上部で発見された。うち2点は10cm離れた地点で、もう1点はそれから80cm離れた地点で

発見された。

鹿児島大学農学部の西中川駿教授の鑑定により、この齒が牛歯であることが判明した。

周濠から出土している土器からみて、周濠が埋没したのは、奈良時代末期頃（8世紀後半）と考えられ、牛歯も奈良時代末期頃のものと考えられる。

（2）牛歯の観察

牛歯については、西中川駿教授に、専門的立場からの御執筆を頂き、本書に収録したので、その項を見て頂きたい。

（高木 正文）

第4節 古墳の保護と活用

試掘の結果、後円部の北側に周濠が確認された。周濠の幅は意外に広く、試掘地点で約11mを測った。

試掘調査をふまえた協議の結果、路線変更による古墳周濠の回避は不可能であったので、工事方法等について事業者と協議を行った。事業者の八代土木事務所でも最大限の努力をはらわれ、文化財保護のため次のような工法を採用された。

道路部分にかかる周濠は、長さ約25mであるが、幸いこの部分は歩道の部分であった。そこで、周濠にかかる部分は張出し歩道構造とし、基礎工事によって周濠を損傷することなく施工することとした。また、周濠の範囲が分かりやすいように、歩道上面に周濠の輪郭を平面的に表示した。さらに、古墳近くの残地を利用して、古墳見学にも利用できる駐車スペースを確保し、陶板による解説施設を設置した。

このような問題を契機として、八代市教育委員会では八代大塚古墳の保存整備計画の策定に着手した。計画の骨子は、古墳の本体部分は民有地であるので、用地を購入すること、古墳本体の整備や周辺の修景等である。

八代大塚古墳は、八代の平野部では最大規模の前方後円墳であるが、民有の果樹園であったこともあり、見学に訪れる人も数少なかった。この計画が進めば、八代大塚古墳の環境は一変し、古墳の保護・活用が促進されると思われる。開発問題を契機としているとはいえ、事業者と文化財部局の協力体制により、最終的には文化財保護が前進した事例といえよう。

（松本 健郎）

第V章 まとめ

1 古墳の環境

八代大塚古墳は、熊本県八代市上方町下野森1170番地にあり、球磨川下流域の北岸16,00m、龍峯山塊の西麓からわずか500mほど八代平野に入った地点にある。

周辺の遺跡は、縄文時代のものとしては遺物がわずかに採集されている程度であるが、弥生時代になると、中期から後期にかけての遺跡が確認されており、最近、球磨川南岸の平野部では後期の溝を巡らし、木製品を出土する集落遺跡（下堀切遺跡^{1, 2)}）が発見されているので、球磨川北岸においてもかなりの規模の集落が形成されていたものと考えられる。

古墳時代になると、八代平野では多くの古墳群が形成されている。

八代大塚古墳の周辺では、北に川田町の古墳群があり、前方後円墳の車塚古墳と岡塚2号墳（岡の坊古墳）を中心に、元は15基を越える古墳があったと言われている。

八代大塚古墳は、上片町から東片町に分布する古墳群に含まれ、この古墳群はさらに大塚古墳群、上片町塊の岩屋古墳群、乙丸古墳群、東片町古墳群に細分できる。この中で中核になるのがすべて前方後円墳から成っている大塚古墳群で、長塚古墳（消滅）・八代大塚古墳・茶臼山古墳・高取上の山古墳が順に北から並んでいる。大形の古墳が多く、茶臼山古墳は全長100mを越えると推定され、この古墳群が八代平野の最有力者の墳墓群と考えることができる。

古代においては近くに、八代郡寺あるいは芦北郡寺と推定されている興善寺庵寺や護神寺跡があり、洗切遺跡からは奈良三彩片や墨書き土器が出土しており、古代の片野駅もこの付近に想定されており、この地域が古墳時代から古代にかけて重要な位置を占めていたことがわかる。

2 周濠とその遺物

今回の八代大塚古墳の調査は、都市計画道路八代臨港線建設に伴って、古墳の北側、後円部の周濠の一部が道路敷になるために行なったが、その結果、周濠の規模が明らかになり、埴輪などの遺物も検出された。

周濠は、確認面で幅10.5mあり、削平を受けているとみられるので元は11m程あったものと考えられる。深さは1.3m程しかないので、浅くて広い周濠と言うことができる。しかし周濠底は一定ではなく、調査区の南側では途中に段差があり、35cm程深く掘ってあった。

周濠の中から多数の埴輪の破片が出土したが、出土状態からみて、周濠の外側から転落した可能性が強く、周堤帯の上に並べ立てられていたのではないかと考えられた。

埴輪は、円筒埴輪と朝顔形埴輪があり、円筒埴輪の方が多かった。

円筒埴輪は、5段で4突帯を巡らし、第2段目と第4段目に同一方向に穿孔された円形スカシを持ち、その間の第3段目にそれと直交する方向に穿孔されたスカシを設けている。復元すると、口径30~47cm、底径22~30cm、高さ55~65cm程度と推定される。

朝顔形埴輪は、円筒部は円筒埴輪の造り方に似るが、垂直に立ち上がり、第5段目の肩部にもスカシを持つとみられ、突帯は頭部に一条と、頭部と口縁部の間にても一条を巡らしている。復元すると、口径38~44cm、頭部径13~17cm、底径22~30cm、高さ65~90cm程度と推定される。

これらの埴輪は、製作技法の違いから複数の工人が作ったと考えられるが、ハケメ調整で仕上げたのが少なく、ナデ調整で仕上げたのが多いのが特徴である。

埴輪といっしょに周濠から少量の須恵器と土師器の破片が出土した。須恵器は、壺・鉢・壺があり、土師器はカメがあった。これらは器形などから、8世紀後半、奈良時代末の遺物と考えられる。

のことから、埴輪類が周濠に転落し、埋没したのは、奈良時代末頃と考えられる。

また、周濠から牛歯3個も出土したが、これも奈良時代末頃のものと考えられる(付論参照)。

3 墳形と規模

八代大塚古墳は、後世に耕地や墓地等に利用されて来たため、正確な墳形や規模は不明であるが、過去の記録、昭和42・43年度の調査⁴⁾、および今回の調査の成果をもとに、今後の調査においてより正確に修正されることを願って、再度その概要を記しておく。

八代大塚古墳は、主軸をN-52°-Eにとり、前方部を南西に向かう前方後円墳で、全長は約56mである。後円部径約28m、前方部長約28m、同幅約43m、くびれ部幅約30mを測り、後円部の高さは約4.5mで、前方部より後円部がわずかに高い。

また、『八代郡誌』や乙益重隆氏の『肥後上代文化史』によると、くびれ部に造り出しがあったものと考えられる。

周濠については、昭和31年の蓑田鶴男氏の測量図(本書に収録)⁷⁾から見て、墳丘をほぼ全周していたものとみられ、周濠の幅は約11mと考えられる。

昭和42・43年度の調査の際、周濠がなかったくびれ部東側部分は、陸橋部と考えられる。

4 くびれ部の遺物と古墳の年代

昭和42・43年度の調査で、くびれ部付近から人物埴輪の頭部や家形埴輪の破片とみられる形象埴輪が出土しており、不明の石製品も発見されている。

この石製品は、全長100.5cm、最大幅43.0cm、最大高48.0cmある凝灰岩製で、一面に幅23.0cm、深さ2.5cmの浅い溝が走っている。この溝に注目して類例を搜せば、玉名郡菊水町江田清原の江田船山古墳の北方約90mの地点から石人(短甲)や家形石製品などと共に発見された、

下面に溝のある腰掛形石製品に求めることができる。腰掛は埴輪にもあるが、やはり下面に溝のある例が多く、八代大塚古墳の石製品も腰掛を表現したのではなかろうか。

なお、この石製品と人物などの形象埴輪は、くびれ部あるいは造り出しの上に置かれていたのではないかと推定される。

くびれ部付近からは、須恵器や土師器、馬具などの副葬品としての遺物も発見されており、位置的に見て、後円部の南側に当るところから、古墳の主体部は南側に開口しているものと考えられる。まだ主体部は確認されていないが、周辺の古墳の例から見て、横穴式石室と考えられる。

くびれ部付近から出土した須恵器は、壺・高壺・甕・器台・壺・壺などがあるが、器形から3期に分類できる。最も古式の一群であるⅠ期の須恵器は6世紀の前半、新しいⅢ期の須恵器は6世紀末と考えられる。

以上のことから古墳の築造年代を6世紀の前半と考えておきたい。

最後に、調査から報告書作成までにおいて御協力頂いた方々と、調査後の古墳の保護・活用に御尽力頂いた関係者に感謝すると共に、今後さらに八代大塚古墳が解明され、保護されることを願って筆を置きたい。

(高木・澤田・吉永)

参考文献

- 1) 吉永 明 『下堀切遺跡Ⅰ』 八代市文化財調査報告書 第3集 八代市教育委員会 1988年
- 2) 吉永 明 『下堀切遺跡Ⅱ』 八代市文化財調査報告書 第4集 八代市教育委員会 1989年
- 3) 佐藤伸二・中田好則 『洗切遺跡調査報告』 八代市・洗切遺跡調査団 1982年
- 4) 乙益重隆ほか 『八代大塚古墳』 八代市文化財調査報告書 第1集 大塚古墳発掘調査団・八代市教育委員会 1987年
- 5) 石川愛郷編 『八代郡誌』 八代郡教育支会 1927年
- 6) 乙益重隆 『肥後上代文化史』 日本書院社 1954年
- 7) 萩田田鶴男 『八代市史』 第1巻 八代市教育委員会 1992年
- 8) 乙益重隆 『熊本県菊水町清原の石製表飾』『九州考古学』 36・37 九州考古学会 1969年
- 9) 高木誠治 『清原石人遺跡に於ける石製品発見の記録』『肥後考古』 第2号 肥後考古学会 1982年

付論 熊本県八代大塚古墳出土の牛歯

鹿児島大学農学部 西中川 駿・日高祥信

はじめに

わが国の遺跡から出土した牛の遺体は、筆者らのこれまでの調査で213ヶ所あり、九州でも53ヶ所から出土している。しかし、最も古い出土例は東京都の伊皿子貝塚からの弥生中期のもの

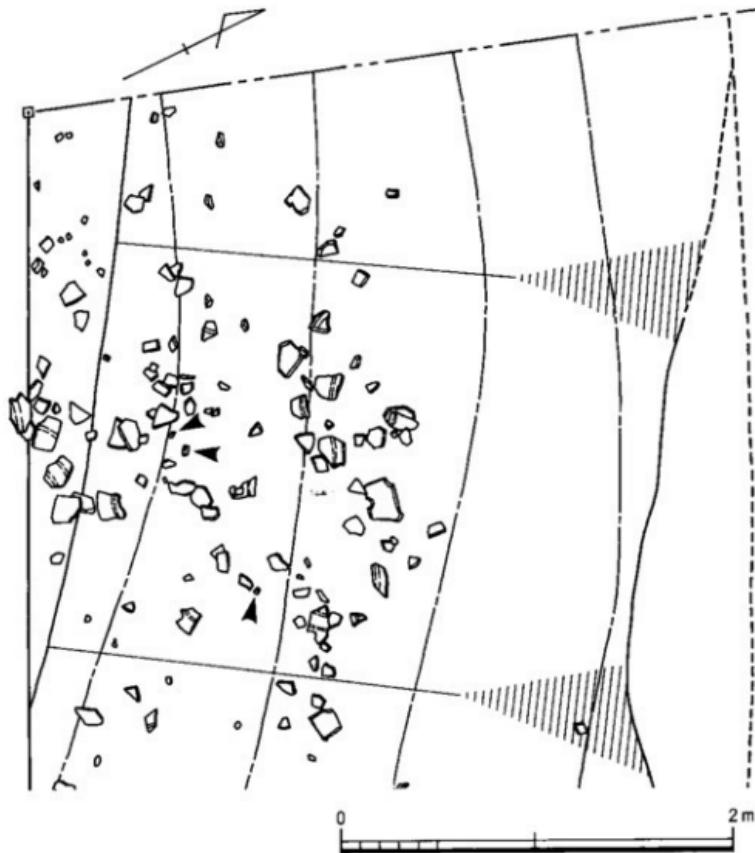


図1 周濠の牛歯出土状態図

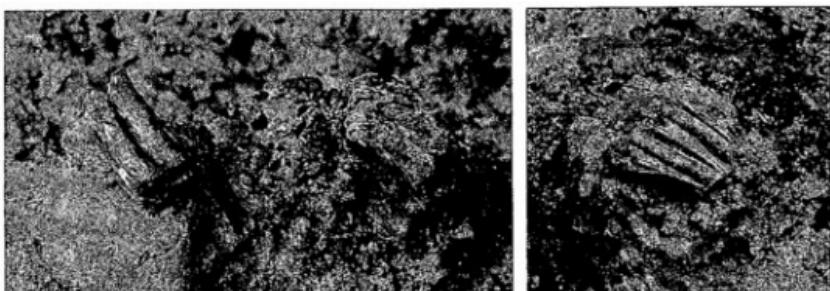


図2 周濠の牛歯出土状態写真

であり、縄文時代の出土例は、現在否定的である。

熊本県からの牛の出土例は、馬より少ないが、宇土城三ノ丸跡（5世紀）、カキワラ貝塚（古墳～中世）、肥後国分僧寺跡（奈良～平安）、淨光寺蓮華院跡（中世）など5ヵ所でみられる。今回調査を依頼された牛歯は、八代市上片町の八代大塚古墳から出土したもので、熊本県文化課高木氏の指導の下に、八代臨港線建設のため平成4年1月～3月に発掘されたものである。牛歯は奈良時代末（8世紀後半）の人工遺物と共に伴したものであり、肉眼的、計測学的に検索した後、日本在来牛のものと比較検討したので、その概要を報告する。

出土牛歯の概要

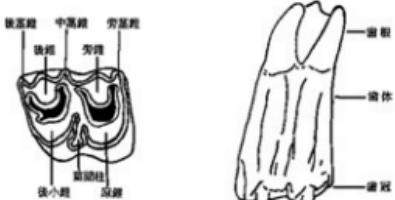
八代大塚古墳の周濠内から出土した牛歯は、右側上顎の第一後臼歯、第三後臼歯ならびに左側上顎の第二後臼歯の3個で、いずれも不完全な物である。臼歯の一般形状の名称は、図3に示し、歯の計測値は表1に示した。

左側上顎第一後臼歯（R, M¹, 図4-1・2参照）

歯根は完全に欠如する標本で、また、歯冠部で頬側の旁茎錐、旁錐、中茎錐、後錐および後茎錐を欠いている。口蓋側はほぼ原形を保っており、咬合面のエナメルヒダは明らかである。歯冠長は25.95mmで、これは口之島牛の雌の大きさである。

右側上顎第三後臼歯（R, M³, 図4-3・4参照）

歯根尖は欠損し、歯冠部は口蓋側の原錐を欠いているが、保存状態はよく、咬合面の磨耗はほとんどみられなく、萌出直後のものと思われる。歯冠長×歯冠幅は、29.75 × 19.10mmで、口之島牛の雌と同じ大きさである。

図3 牛歯の各部位の名称
左：咬合面 右：頬側面

出土牛歯の概要

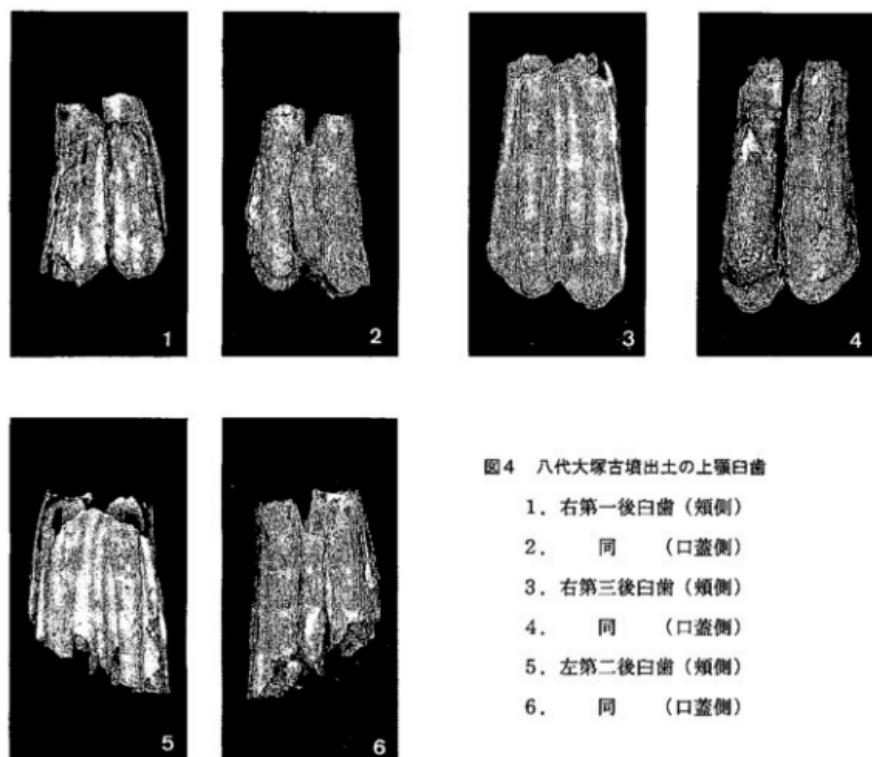


図4 八代大塚古墳出土の上顎臼歯

1. 右第一後臼歯（頬側）
2. 同（口蓋側）
3. 右第三後臼歯（頬側）
4. 同（口蓋側）
5. 左第二後臼歯（頬側）
6. 同（口蓋側）

表1 八代大塚古墳出土牛歯の計測値 (mm)

計測部位	八代大塚 計測値	口之島牛		現代黒毛和種	
		雄(n=5)	雌(n=11)	雄(n=10)	雌(n=35)
右上顎第一後臼歯 齒冠最大長	25.95	26.78±1.65	22.75±1.54	23.73±2.63	24.42±2.51
左上顎第二後臼歯 齒冠最大長	29.40	31.50±2.69	26.00±1.28	27.94±2.04	27.98±2.16
齒冠最大長	23.00	21.06±1.06	22.79±0.96	25.61±0.87	23.84±1.76
右上顎第三後臼歯 齒冠最大長	29.75	30.68±2.49	29.79±1.17	31.79±2.85	30.30±1.34
齒冠最大長	20.60	21.78±1.29	22.00±1.39	24.20±1.06	22.73±1.75

左側上顎第二後臼歯（L, M², 図4-5・6参照）

歯根および歯冠部を欠損する歯で、葉間柱は崩出時の状態で咬耗はみられない。歯冠長×歯冠幅は29.40×23.00mmであり、黒毛和種の雌とほぼ同じ大きさである。

以上3個の臼歯は、同一個体のものと思われ、歯根や咬合面の磨耗の状態から3才前後であると推定される。また、各歯の歯冠長から骨長を推定し、さらに体高を推定すると、122.5±2.3cmの値が得られた。これは現生の黒毛和牛の雌と口之島牛の雄の体高によく似ている。牛では歯による雌雄判別法が確立していないので、雌雄を判別することは困難である。しかし、当時の牛が現生の口之島野生化牛と同程度の大きさであったとすれば、本遺跡出土の牛歯は、雄のものであることが推測される。

考 察

牛の出土例は、全国213ヵ所でみられるが、このうち九州が53ヵ所と最も多い。時期的には中世が多く、弥生、平安、奈良とつくづく。しかし、弥生時代の遺物については、異論が多く、今のところ東京都伊皿子貝塚出土のものが最も古く、弥生中期とされている。

八代大塚古墳から出土した歯は、奈良時代末の人工遺物と共に伴したわずか3個の臼歯のみである。一般に火山灰土（酸性土壌）の遺跡では骨は消失し、歯のみが残ることが多い。本遺跡の牛の遺体は歯のみであることから、伊皿子貝塚の頭蓋のように、祭祀に用いられたことも考えられるが、利用目的が何であったかはわからない。

本遺跡出土の臼歯は、きわめて若い牛の歯であり、その大きさから体高を推定すると、122.5cm前後であり、これは宇土城三ノ丸跡（雄125cm、雌115cm推定）やカキワラ貝塚（雄120cm、雌115cm推定）の範に入り、現存する日本在来牛の見島牛や口之島牛とほぼ同じ大きさであったことが想像される。

まとめ

八代大塚古墳周辺内から出土した奈良時代末の人工遺物と共に伴した牛の歯を調査した。

1. 牛の歯は、右側上顎第一（M¹）、第三後臼歯（M³）および左側上顎第二後臼歯（M²）の3個45.9gである。
2. 歯の形状から、同一個体のもので、3才前後の若い個体である。歯冠長はそれぞれRM¹が25.95mm、RM³が29.75mm、LM²が29.40mmである。
3. 歯冠長から頭蓋長を推定し、さらに体高を推定すると、122.5±2.3cmであり、これらは現存の在来牛と同じ大きさである。

参考文献

- ・金子治昌：第2号方形周溝墓西溝出土の家牛（*Bos Taurus*）頭骨・「伊皿子貝塚遺跡」伊皿子貝塚遺跡調査会、476-478（1981）
- ・西中川 駿：宇土城三ノ丸跡出土の動物骨について、「宇土城三ノ丸跡」・宇土城三ノ丸跡発掘調査会、71-83（1982）
- ・西中川 駿：七ッ江カキワラ貝塚、竹の下貝塚出土の動物骨・「七ッ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚」・熊本県文化財調査報告79、77-85（1986）
- ・西中川 駿・本田道輝・松元光春：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究・平成元年-2年度文部省科学研究費（一般B）研究成果報告書、P 1-197（1991）
- ・芝田清吾：日本古代家畜史の研究、P 100~109（1969）

報告書抄録

書名	八代大塚古墳				
副書名	都市計画道路八代臨港線建設に伴う埋蔵文化財調査				
シリーズ名	熊本県文化財調査報告				
シリーズ番号	第136集				
編集者名	高木正文				
編集機関	熊本県教育委員会				
所在地	〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号				
発行年月日	西暦 1993年3月31日				

所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
八代大塚古墳	八代市上片町下野森	432024	62-10-22	19910802 ↓ 19930218	約200m ²	道路建設

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古墳時代後期	古墳の周濠	円筒埴輪・朝顔形埴輪の破片多数	周濠の幅約11m
奈良時代末		須恵器・土器師の破片 牛齒	周濠内に埋没した遺物

図 版

図版1



水利事業前の古墳群空中写真（昭和40年頃）

図版2



水利事業後の古墳群空中写真（昭和50年代後半）

図版3



1) 古墳全景（北から）



2) 古墳全景（南から）



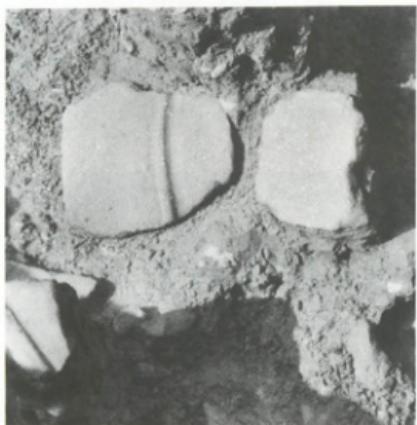
3) 周濠A・B・C区検出状態



1) 周濠A区遺物出土状態（全景）



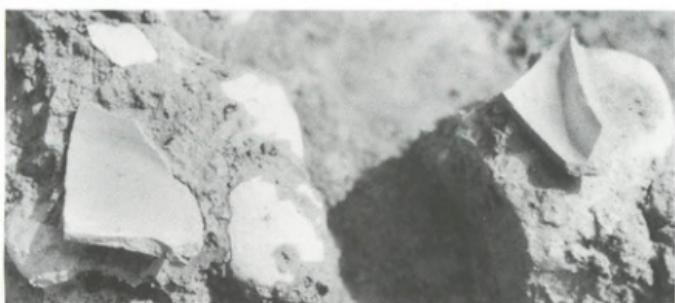
2) 周濠A区遺物出土状態（部分）



3) 周濠A区埴輪出土状態

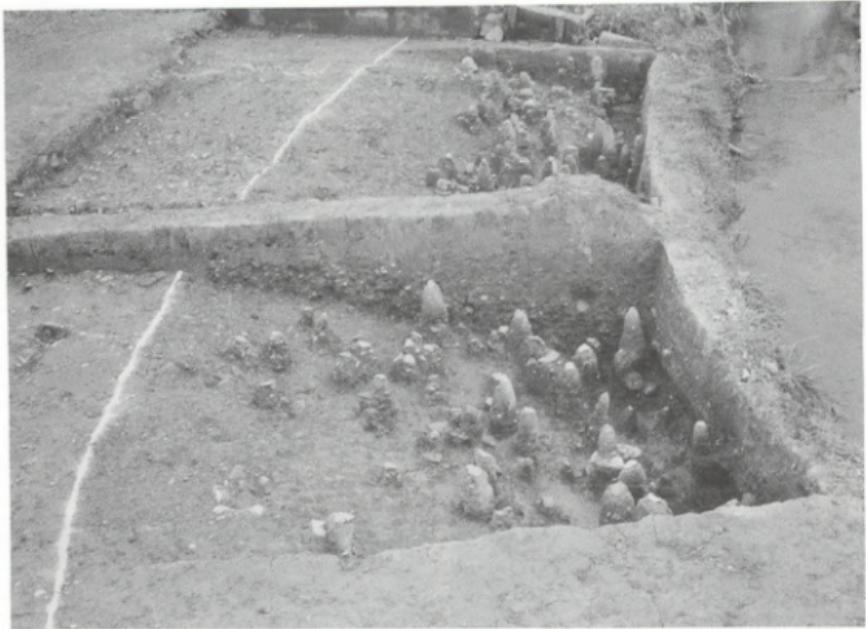


4) 周濠A区埴輪出土状態



5) 周濠A区須恵器出土状態

図版5



1) 周濠B・C区遺物出土状態



2) 周濠B区遺物出土状態



1) 周濠C区遺物出土状態



2) 周濠C区遺物出土状態（部分）

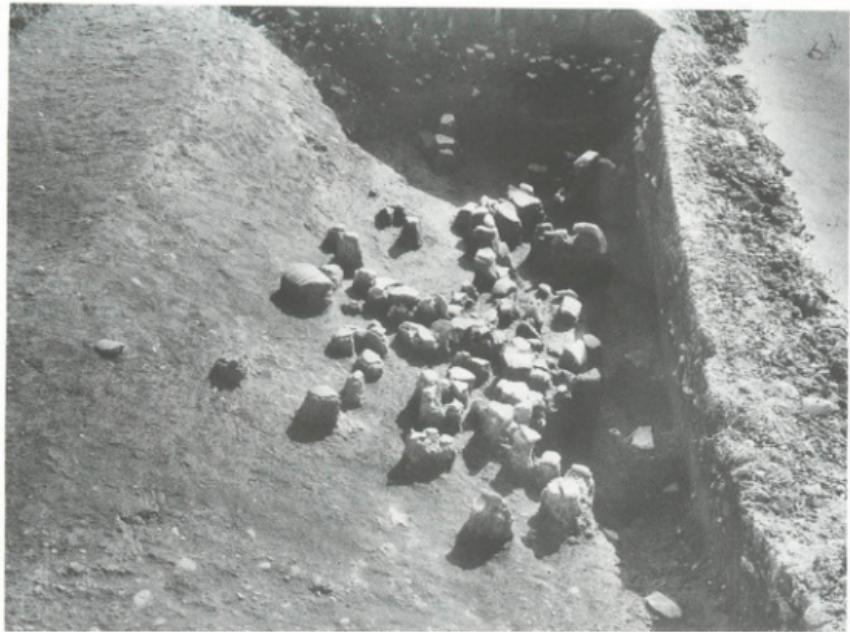
図版7



1) 周濠A・B・C区完掘状態（北西から）



2) 周濠A・B・C区完掘状態（東から）



1) 周濠D区遺物出土状態



2) 周濠D区遺物出土状態（部分）

図版9



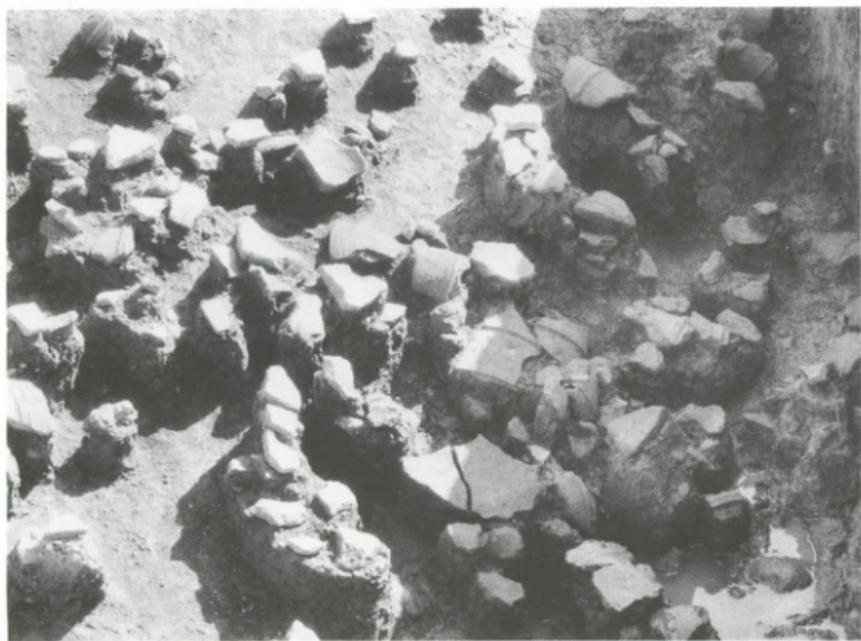
1) 周濠D区遺物出土状態（部分）



2) 周濠D区東側土層断面



1) 周濠 E 区埴輪出土状態



2) 周濠 E 区埴輪出土状態（部分）

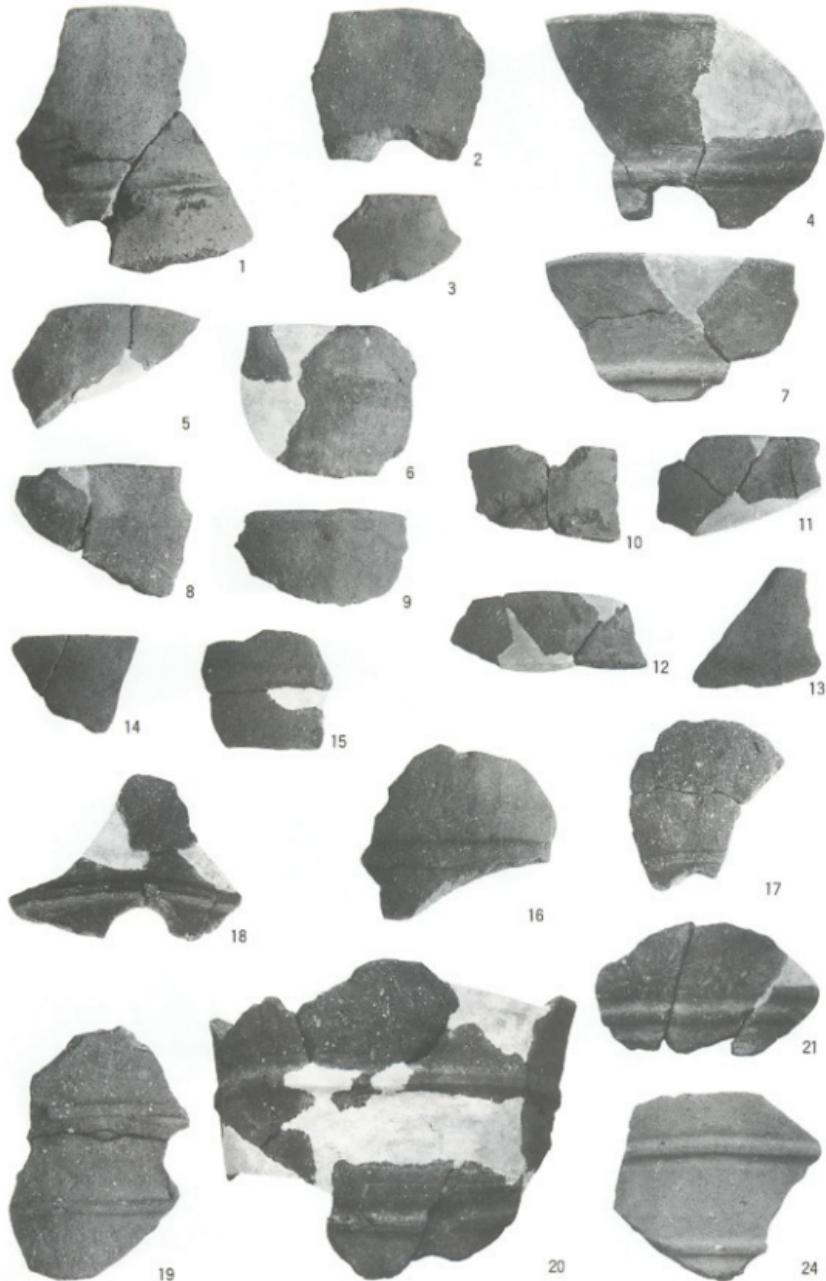
図版11



1) 周溝D・E区完掘状態（北西から）

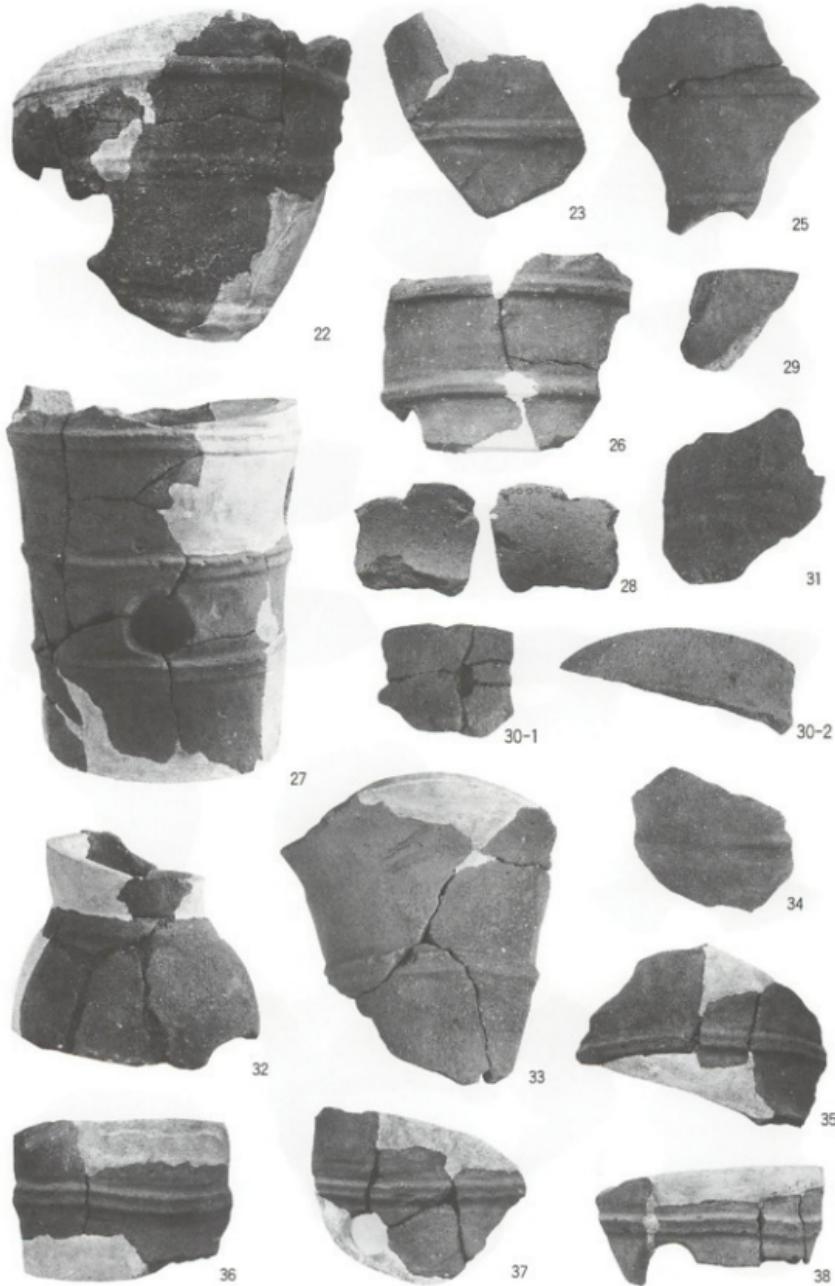


2) 周溝D・E区完掘状態（東から）

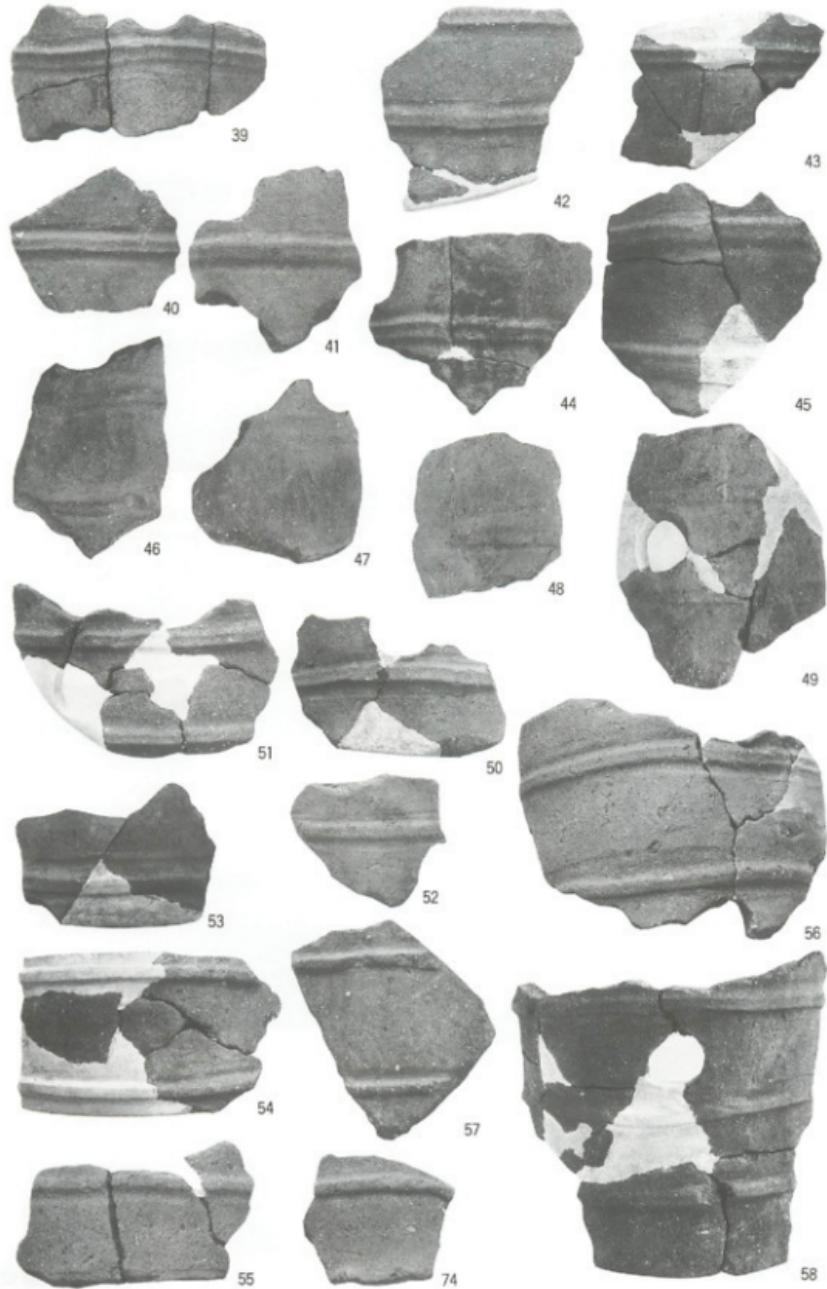


周漆出土埴輪 (1)

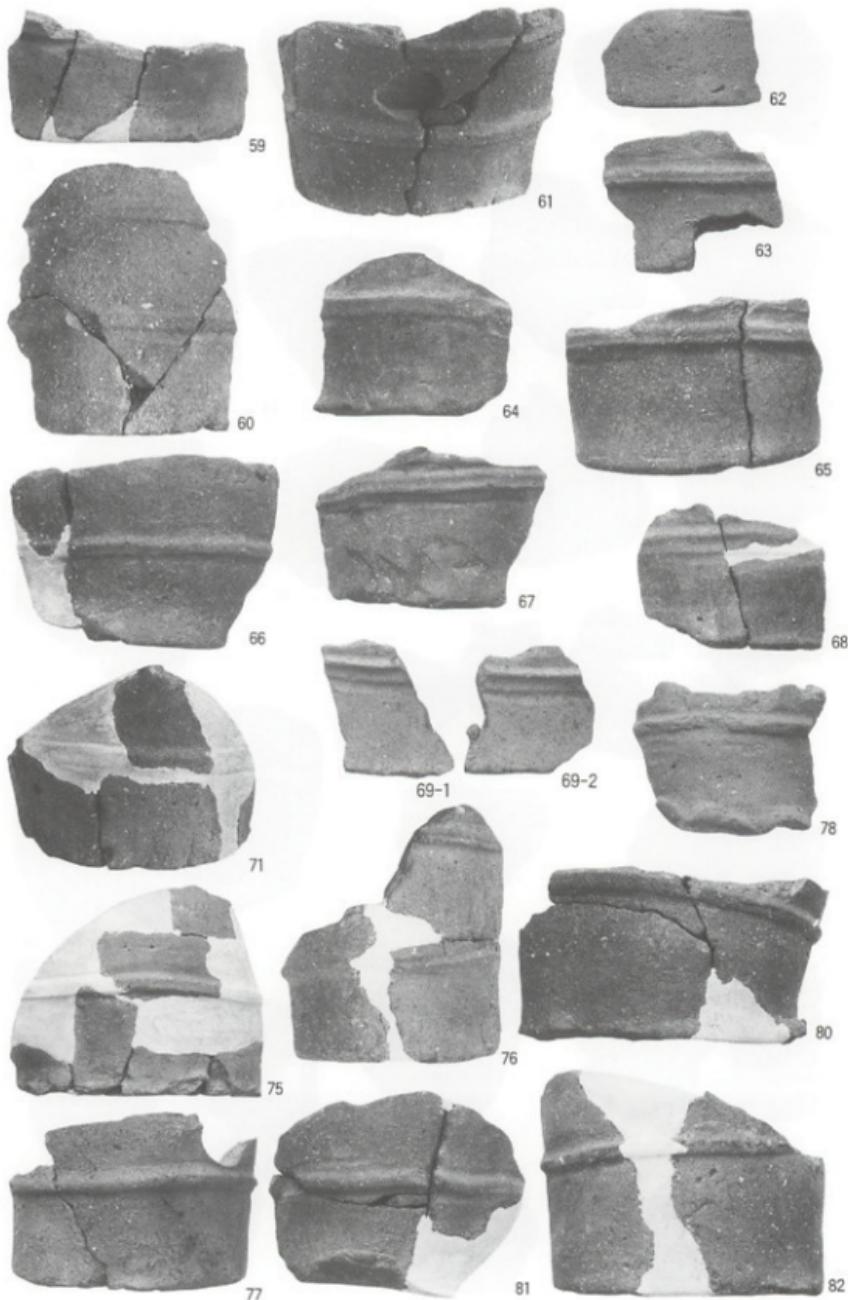
図版13



周漢出土埴輪（2）



図版15



周漢出土埴輪（4）

熊本県文化財調査報告 第136集

八代大塚古墳

平成5年3月31日

編集発行 熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 株式会社 城野印刷所

〒861-22 熊本県上益城郡益城町広崎

1630-1(産業団地内)

04 教委 教文
② 015

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第136集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：八代大塚古墳

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日